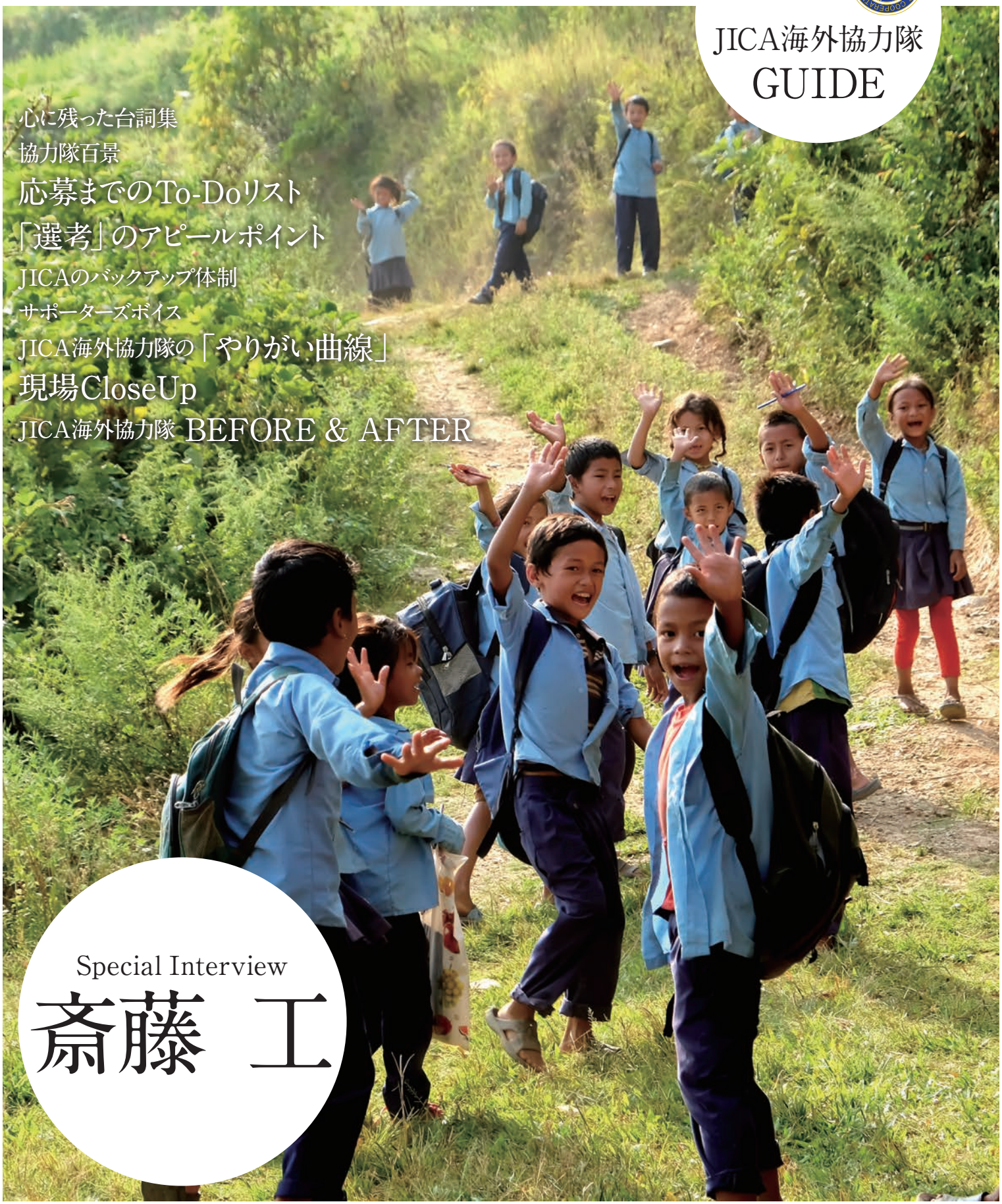
クロスロード

CROSSROADS

JICA海外協力隊
GUIDE



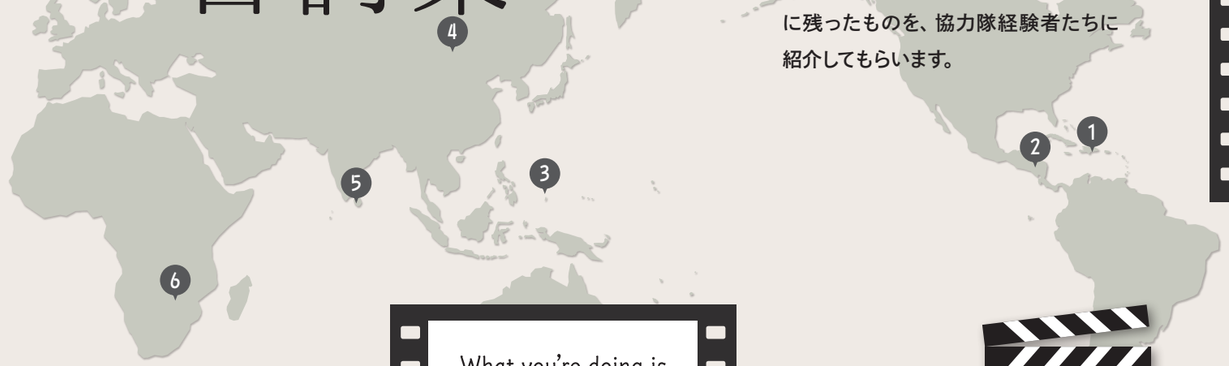
心に残った台詞集
協力隊百景
応募までのTo-Doリスト
「選考」のアピールポイント
JICAのバックアップ体制
サポーターズボイス
JICA海外協力隊の「やりがい曲線」
現場CloseUp
JICA海外協力隊 BEFORE & AFTER

Special Interview
斎藤 工

JICA
海外協力隊

心に残った台詞集

現地の人たちに掛けられる言葉に、時に喜び、時に励まされ、時に傷つきながら、彼らと活動や生活を共にするJICA海外協力隊。現場では具体的にどのような言葉が交わされるのでしょうか？　現地の人たちに掛けられた言葉で特に心に残ったものを、協力隊経験者たちに紹介してもらいます。



CONTENTS

04 Special Interview 斎藤 工さん（俳優）
08 協力隊百景
12 応募までのTo-Doリスト
13 「選考」のアピールポイント
14 JICAのバックアップ体制
16 サポーターズボイス
18 JICA海外協力隊の「やりがい曲線」
24 JICA海外協力隊 BEFORE & AFTER
28 現場CloseUp
34 JICAボランティア事業の概要

本誌では、JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）について、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2018年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

「十字路」を意味する本誌の誌名は、国際協力に必要な「対話と行動」というイメージにも通じることに由来します。

【表紙写真】
家路につくネパール山間部の子どもたち。通学路は起伏に富む山道だ
撮影：山下さくらさん（ネパール・小学校教育・2015年度3次隊）

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY
レイアウト：S+M DESIGN FACTORY
印刷・製本：弘報印刷（株）

scene 1
ドミニカ共和国
（スペイン語）

Gracias por estar aquí.

ここにいてくれてありがとう。

池林 理恵（いけばやし りえ）さん

【職種】小学校教育
【隊次】2016年度1次隊

教員養成校に配属され、学生への指導に取り組んだ池林さん。当初はスペイン語もままならず、「役に立てていない」と落ち込む日が続いた。そんななかで着任の5カ月後、職場の忘年会に誘われる。うれしい反面、「私には参加する資格などない」と身の置き所がない気持ちで参加した。そんな会の冒頭、学校長（写真右）が挨拶の中で口にしてくれたのが、左掲の言葉だ。何かを成し遂げたことへの感謝ではなく、いること自体への感謝。現地の人の懐の深さが心に響いたこのひと言が、以後、活動のモチベーションとなった。

scene 2
ホンジュラス
（スペイン語）

Ya eres nuestra familia.
Confia en nosotros y
preguntanos
cualquier cosa.

あなたは、私たちの家族の一員。
遠慮せずに頼って甘えなさい。

渡辺まどか（わたなべ）さん

【職種】助産師
【隊次】2016年度1次隊

出産施設に配属され、母親学級の企画・運営などに取り組んだ渡辺さん。初出勤の日の朝、出がけにホストファミリー（写真）のママ（写真左から2人目）が掛けてくれたのが、左掲の言葉だ。以後、活動で大きなイベントや研修会などを控えて不安や緊張が高まったり、人間関係で悩みを抱えたりするたびに、ママはそれを見透かすかのように同じ言葉を掛けてくれた。この地にも自分を受け入れてくれる場所がある――。そうした感覚を与えてくれるこの言葉は、任期中、渡辺さんを絶えず律し、背中を押すものとなった。

scene 3
パラオ
（英語）

You are here in this gym,
that's why I am here now
and training with you.

こうして私がここに来て
トレーニングをしているのは、
あなたがこのジムにいるからよ。

曾根真弓（そねまゆみ）さん

【職種】体育
【隊次】2016年度2次隊

州政府が運営するフィットネスクラブに配属され、トレーニングの指導などに取り組んだ曾根さん。当初、同僚のトレーナーたちには曾根さんの持つ技術を学ぼうという意欲が見られず、曾根さんはトレーナーのひとりとしてひたすら利用者へのサービスをこなすだけの日々が続いた。そうして自分の存在意義への疑問が高まっていくなか、着任の半年後、トレーニング指導の最中に利用者（写真右）から掛けられたのが左掲の言葉だ。そこでようやく曾根さんは、「自分は活動を続けて構わないのだ」と思い直すことができたのだった。

scene 4
モンゴル
（モンゴル語）

Маса сэргээн засах
эмчилгээ хийх хэцүү,
гэхдээ
хөгжилтэй байгаа.

マサ、リハビリテーションをするのは
難しいけど、楽しい!!

後上正幸（ごがみまさゆき）さん

【職種】理学療法士
【隊次】2016年度1次隊

総合病院で同僚の運動療法士（写真右）に対する理学療法の指導に取り組んだ後上さん。指導スタイルは、共に患者の治療に当たりながら技術を伝える「OJT」だ。後上さんは同僚の資質を見極めるためにコミュニケーションを密にしながら、彼に適した技術伝達の方法を日々、模索。そうしたなか、着任して10カ月近く経ったころ、治療したばかりの患者の振り返りが終わったところで、同僚がおもむろに口にしたのが、左掲の言葉だ。それまでの指導のやり方が間違ってはいなかったのだと実感できた瞬間だった。

scene 5
スリランカ
（タミル語の方言）

மனா
எப்போதும்
சிரியுங்கெ!

マナは、いつでも笑ってて！

中村真奈（なかむら まな）さん

【職種】服飾
【隊次】2016年度2次隊

州政府の農村開発局に配属され、職業訓練校10校で洋裁の指導に取り組んだ中村さん。当初は現地のシンハラ語とタミル語が不得意で、生徒にからかわれてしまう始末だった。それでもなんとか活動を進め、着任の1年後には、生徒が自作した浴衣のファッションショーを数校合同で開催（写真）。その直前、同僚が約束の事前準備を怠っていたことが判明し、半泣きになっていた中村さんに、ほかの同僚が掛けてくれたのが、左掲の言葉だ。そこで初めて、必要なときに助けてもらえるような人間関係が築けていたのだと知ることができた。

scene 6
ジンバブエ
（英語）

What you're doing is
good idea,
but we can't do that.

あなたがやっていることは
いいアイデアだけど、
私たちにはできない。

大岡沙織（おおおか さおり）さん

【職種】青少年活動
【隊次】2016年度1次隊

特別支援学校で図工授業の支援に取り組んだ大岡さん。自身が行った授業で生徒の反応が良かったときは、その指導案をまとめ、同僚教員に渡した。そんななか、着任して1年近く経ったころに同僚教員（写真右端）から掛けられたのが、左掲の言葉だ。これが活動方針の根本的な見直しにつながった。それまでは「生徒にとって有益な授業」を闇雲に同僚教員に勧めてきたが、「図工に慣れない現地教員にも実践可能な授業であるか」という視点を持ち、簡略化した授業のやり方を見つけるなどの工夫をするようになったのだ。

Special Interview

斎藤 工さん（俳優）

Takumi Saitoh

BSフジの番組『いつか世界を変える力になる』の取材で、派遣中の青年海外協力隊員の活動現場や、二本松青年海外協力隊訓練所における派遣前訓練の現場を訪ねてこられた斎藤工さん。俳優や映画監督として「人間」を描く仕事をされてきたその目に、協力隊はどう映っているのか、お話を伺った。

斎藤さんは2017年10月に二本松青年海外協力隊訓練所を訪問。訓練中の隊員候補者を取材した一方、盆踊り大会が行われていた近くの岳温泉（写真）にも立ち寄り、候補者たちを支え続けてきた地元住民の方々とも懇談した

さいとう・たくみ●1981年生まれ、東京都出身。2001年に俳優としてデビュー後、数々の映画やテレビドラマに出演。12年の短編『サクライロ』で監督デビュー。長編映画としての初監督作品『blank13』（2018年公開）は各国の映画祭に正式出品され、第20回上海国際映画祭「アジア新人賞部門」最優秀新人監督賞など8冠を受賞。14年には、映画館がない地域に映画を届ける活動「cinéma bird」を開始。JICA海外協力隊の「今」を追う旅に出るBSフジの番組『いつか世界を変える力になる』（17年3月に第1部、18年3月に第2部を放送）の取材で、マダガスカルやパラグアイで活動している協力隊員、派遣前訓練を受けている隊員候補者などを訪ねている。

「人生の使い道」を教わった

――斎藤さんには、マダガスカルやパラグアイで協力隊の活動現場をご覧いただいていますが、斎藤さんご自身も、高校時代にバックパッカーをされたり、俳優や映画監督として各国の映画関係者と一緒に仕事をされるなど、「海外」とのつながりが強い人生を歩まれています。そういうご自身の経験に照らして、これまでに接した協力隊員たちをどのように受け止めていらっしゃいますか。

斎藤　協力隊の方々が僕と圧倒的に違うと感じるのは、「個人の馬力」とも言うべきものを持っていらっしゃる点です。僕はどちらかと言うと、人の力を借りながらプロジェクトを大きくしていく「巻き込み型」なんです。協力隊の方々も、人を巻き込みながら活動を進められているとは思いますが、その前提として、まずは「個人」として現地の社会に入っていかなければならない。「私はこういう者です」という看板を掲げ、現地の方々と関係を築いていかなければならない。それは本当に氷を溶かすような根気の要る作業で、「その土地の文化に馴染めない」など、不安や苦労も大きいと思います。しかし、そうしたなかでも、目標に向かう道を辿り続ける確かな馬力。それをお持ちだと感じています。

おっしゃるとおり、僕は沢木耕太郎さんの小説『深夜特急』を読んで海外への憧れを持ち、高校時代にバックパッカーとしてさまざまな国を訪れました。そこで現地の方々と関係を築くようなこともしたのですが、しょせん旅行者であり、逃げ道だらけです。その経験と協力隊の経験は重ね合わせて見ることなどできない。協力隊は、それくらい素晴らしい経験なのだと思っています。

僕が協力隊の方々とお会いするのは番組の取材がメインだったのですが、2018年の7月に「平成30年7月豪雨」の被災地で泥かきなどのボランティアをさせていただいた際には、偶然、やはり現場でボランティアをされていた協力隊のOB・OGの方々とお会いしています。

――OB・OGのほうから斎藤さんに声を掛けてきたのですか。

斎藤　そうです。『いつか世界を変える力になる』をご覧いただいていたようでした。僕が入ったのは、広島市内でも被災の状況が特にひどい場所だったのですが、OB・OGの方々は、そういう最前線で、僕が行く前から、そして僕が帰った後も作業をされていた。「自分が置かれた環境で、自分に何ができるか」ということを自然に考え、社会の支えが一番足りていないところを身を持って補っていく。そういうことができる方々なのだと、あらためて感じました。

僕は俳優という仕事柄、ボランティア活動をすると、そのときに参加している作品などに良くも悪くも影響を及ぼしてしまいます。しかし、あのときはそういう利害などを考えている「間」が嫌で、所属事務所にも伝えず、まったくの個人の立場で現場に赴きました。同じ人間として、被災者の方々に自分は何ができるか。それだけを考えて動いた。そういう発想ができるようになったのは、協力隊の方々と接するようになってからだと思います。「人生の使い道」について、彼らに自然と影響を受けている。僕が広島の被災地に行ったのも、その表れのひとつだったので、そこでOB・OGの方々と出会ったのは意味深く、彼らに声をかけていただけたのはとてもうれしかったです。

仕事の本質に気づける場所

――協力隊員に影響を受けたとのことですが、斎藤さんは『いつか世界を変える力になる』で協力隊員を取材される前から、本業のかたわらで「移動映画館」の活動もされていますね。

斎藤　僕が移動映画館の活動を始めたのは2014年ですが、当時はまだ、「社会の支えが一番足りていないところを、身を持って補っていく」といったことは今ほど意識してはいませんでした。映画に携わる者としてできることを、とにかくいろいろとやりたいという思いのほうが強かった。

移動映画館の端緒は3・11です。僕らの仕事は震災が発生した直後、電力の供給の関係もあって、撮影の現場が一時止まり、俳優はみんな自宅待機になりました。僕は自宅の壁に世界地図を貼っているのですが、僕が住んでいる東京と福島というのは、とても近いんですよ、世界地図では。それなのに、自分はテレビのニュースで被災地の状況を眺めていることしかできない。「音」というツールを持つミュージシャンたちは、被災者の方々に音楽を届けていたのですが、俳優である自分にはそういうツールが見当たらなかった。自分ができることで音楽ライブをやろうということで、僕も被災地を訪れたんです。避難所も回ったのですが、そのなかで、被災した方々には辛い現実から逃避する時間がほぼないということがわかった。寝ても悪夢を見る。子どもたちも、大人がそういう状況であるのを察して、不満を口にするのを我慢するんです。広島でもそうでした。

そうしてあらためて、自分が携わっている「映画」がああいう事態でどういう効力があるかを考えたのですが、そこで思いついたのが、ドイツなどで盛んな「移動映画館」の取り組みでした。被災地では映画館も流されていたので、避難所などで映画の上映をしようと思ったわけです。結局、上映の権利について処理する方法が見つからず、震災の直後は実現できなかったのですが、それから2年ほど経って、日本の映画配給会社の協力を得ることもでき、移

パラグアイの農村部で生活改善支援などに取り組む稲葉健一さん（コミュニティ開発・2015年度1次隊＝写真左）の活動現場を訪ねた斎藤さん

動映画館の活動をスタートさせることができたのでした。

その活動が、今では日本国内だけに止まらず、さまざまな途上国の子どもたちに映画を届ける活動へと広がっています。それは、マダガスカルで協力隊の方の活動現場を訪ねたときの経験がきっかけでした。

――『いつか世界を変える力になる』でも、マダガスカルの子どもたちと映像をつくるシーンがありました。教室の白い壁を使って、出来上がった映像の上映会も開いていましたね。

斎藤　協力隊の方が活動していたのは、マダガスカルの農村部にある小学校だったのですが、僕が映像づくりを体験してもらったのは、彼女の教え子たちです。そのときに、撮影やメイクなど、映像制作に必要となるさまざまな技術を学んでもらうワークショップも合わせて行いました。その取り組みを通して、僕は映画というのは途上国の子どもたちにこそ観てもらうべきものだと確信したわけです。途上国の、特に農村部の子どもたちには、世の中にあるさまざまな職業についての情報が届いていないこと、映画はそういう情報を届け、彼らの未来を増やすツールになり得ることを知ったからです。電気も届いてないような村の子どもたちが、映画で人生の擬似体験をしたり、遠く離れた場所の景色を見たり、ときに人間以外のものに感情移入したりする。そういう経験を通じて、自分の夢を広げてもらえる。

映画は、実は先進国の一部の富裕層の娯楽でしかなかったんです。自分がそれまで制作にかかわってきた映画の行き先が、そうした限られた範囲でしかなかったことのショック、そのことを意識すらしていなかったことのショックは、とても大きいものでした。そうして僕は映画の「本質」に気づかされたわけですが、協力隊員が派遣される場所というのは、いずれの職業であれ、日本人がその「本質」に向き合うことができる場であるということなのだと思います。

そうしてマダガスカルから帰国すると早速、以前からカンボジアで映画を上映する活動に取り組んでいた日本のNGO「ワールドシアタープロジェクト」と共に、途上国で映画を上映する活動に着手しました。

――ご自身が制作に携わったクレイアニメ『映画の妖精 ～フィルとムー～』ですね。

斎藤　そうです。世界のどこででも自由に上映できるよう、権利をフリーにしており、翻訳や吹き替えの手間が要らないよう、台詞もなくしてあります。現在は、スマートフォンに取り付ける簡易プロジェクターが売られており、白い壁さえあれば、スマートフォンの電池だけで上映会を開くことができるようになっています。それを使って、すでにアフリカを中心とする国々の40～50万人にのぼる子どもたちに観てもらっています。上映会の開催に力を貸していただいた方の中には、派遣中の協力隊員の方々もいるんです。今後も、権利フリーの新しいクレイアニメを制作していく予定であり、派遣中の協力隊員の方々の力を借りながら、世界中の途上国に「映画館」を広めるというのが、僕が今、ひそかに抱いている野望です。

協力隊員はジャズプレーヤー

――『いつか世界を変える力になる』では、派遣中の協力隊員だけでなく、任期を終えた後に協力隊経験を生かしながら仕事に取り組んでいる人へのインタビューもされています。斎藤さんは、協力隊経験で得られるものについて、どのように感じていらっしゃいますか。

斎藤　協力隊員は、自分が生まれ育ったのとは違う場所、予想できないことだらけの環境に身を委ねる。その中で、現地の方々と自分との間の相違点と共通点を見つけ、自分というものの知らなかった側面に出会う。そうやって自分を広げる機会にほかならないと思います。

日本人は、決められたことを、決められたとおりにこなすのは得意だけれども、「余白」がない。そこに海外との大きな差を感じています。僕自身も、かつて「20代はそういうものなのかな」と思いながら、分刻みのスケジュールで仕事をしていましたが、気がつくと、30代になった今でも同じような仕事の仕方をしている。海外の方と一緒に仕事をすると、「どうしてそんなに働き過ぎるのか?」と心配されたりします。「インプットをする余裕はあるのか」と。確かにそうだなと思います。良く言えば「勤勉」。職人的で美しい姿だと言えるのかもしれないですが、しかし、それは「クリエイティブ」ではないんです。傷は負わないけれど、展開もしていかない。

そういう意味で、日本人の僕らには「冒険心」と「偶発性」が必要なのだと思っています。「決められていること」がない環境に思い切って身を委ねることで、予想していなかった景色、知らなかった自分に出会う。そのときに「魂の必然」のようなものを感じる余裕を持たなければならない。「この瞬間のために、環境に身を委ねたのだ」と。「まさか」という偶発的なことが起こったら焦るけれども、一方で起こってほしいとも期待する。そういう「冒険心」と「偶発性」に満ちているのが、まさに協力隊の経験ではないでしょうか。

――予想できないことだらけの環境の中で生きていく力は、急速に変化する現在の日本社会で不可欠なものでもありますね。

斎藤　「決められていること」がないなか、協力隊の方々は自分の本質でぶつかっていくしかない。そうすれば、おのずとフレキシブルで力強い心、「心の体幹」とも言うべきものが鍛えられているはずです。そうなると、怖いものはないですよね。どこにいても、どんな状況に立たされてもやっていける。帰国された後、とても豊かな時間を過ごされるに違いないと思います。僕もそうありたいと、協力隊員に接するたびに思います。

僕はジャズをよく聴くようにしているのですが、それは、放っておくと脳みそが「クラシック寄り」になってしまうからなんです。決められた譜面どおりに演奏するクラシックは、「正解」があらかじめ見えているから楽でもある。一方、ジャズは他のプレーヤーや観客、会場など、環境と「共鳴」しながら、その瞬間、その瞬間に宿ったもので音楽を紡いでいく。芝居も、ジャズのように瞬間に宿るものが重要だと思っています。リハーサルを何回もやり、決められたとおりに動こうとしているなかで生まれたものは、絶対に人の心など動かせない。自分の本質でぶつかって、ある「本物」とでも呼ぶべきものを宿すことができた瞬間に、観ている方もふと虚構であることを忘れ、ぐっと作品に近づいてくれる。自分の本質でぶつかり、挑戦と失敗を重ねるなかで、協力隊の方々は言わばジャズプレーヤーになっていくのだと思います。

――最後に、協力隊への参加に興味を持つ読者の方々に向けて、メッセージをいただけますでしょうか。

斎藤　若い世代の方々は、思いのほか、自分の未来を描けてしまっているのではないでしょうか。日本社会では、「自分の未来を描き、それを実現するための努力をする」という生き方が良しとされているからです。もちろん、描いた未来があってもいい。けれども、それに縛られる必要はないと、僕は思っています。別のタッチで、別の筆で描かれる、まったく違った未来というものも、確実にあるはずだからです。それを描くためには、「セルフプロデュース」をいったん捨て、環境に自分を委ねてみることが必要であり、協力隊というのは、そういう機会のひとつにほかならないと思います。そうして、言わば環境に描いてもらった自分の新しい輪郭というのは、かつて自分で描いた未来より、よほど逞しく、鮮やかで、みずみずしく、光を帯びているはずです。ぜひ多くの方に、そういう新しい自分に出会っていただきたいです。 C

協力隊で鍛えられる「心の体幹」は確実に人生を豊かにする

上：斎藤さんは、マダガスカルの農村部にある小学校で体育授業の質向上に取り組んでいた郡山文さん（青少年活動・2015年度3次隊）の活動現場を訪問。その際、郡山さんの教え子たちを相手に、映像づくりを体験してもらうワークショップも行った
下：郡山さん（中央左）やその教え子と共に、ワークショップでつくった映像を鑑賞する斎藤さん

協力隊百景

Views of JICA Volunteer

小学4年生の体育の授業で「リレー」の指導を行う黒谷素代さん（ウガンダ・小学校教育・2017年度1次隊）

9分野・120以上の職種と、70を超える派遣国——。JICA海外協力隊に求められる活動は実に多様であり、それゆえ、さまざまなキャリアの方にご参加いただくことが可能となっています。ここでは、どの職種とどの派遣国が結びつくと、どのような活動が展開されるのか、その一端をご紹介します。

コミュニティ開発 × インド

飯田陽平さん
（2015年度4次隊）

作成したポスター教材を使って養蚕技術の講習を行う飯田さん

作成したポスター教材が貼られた養蚕部屋

飯田さんにとって協力隊とは？

「国際協力の道に向けて進み始めた私の原点」

飯田さんの配属先は、国内の養蚕業を所管するインド繊維省中央蚕糸局。同局は「地域養蚕研究所」を各地に置き、それぞれの管轄地域の地理的条件のもとでどのような生産手法をとるべきかを探っている。飯田さんはそのひとつを拠点に、養蚕農家の自助グループの立ち上げや、それらを対象とした技術支援に取り組んだ。

着任当時、現地の養蚕には「餌やりの回数」や「蚕の病気を予防するための衛生管理」など、「基本技術」に問題があった。それらについて農家に正しい知識を得てもらうために飯田さんが取った方法は、「ポスター教材」の作成だ。養蚕部屋に貼ってもらえば、いつでも目に入り、写真やイラストをメインとすれば、字が読めない農家にも理解が容易だとの判断からだった。

印刷したポスター教材を農家に配る際は、その内容を噛み砕いて伝える講習も開催。農家には「わかりやすい」と好評で、「餌やりや手洗いの回数を以前より増やすようになった」といった声も聞かれた。

いいだ・ようへい●1989年生まれ、長野県出身。大学では「視覚メディア」を専攻。卒業後、カナダの旅行会社のビデオカメラマンを経て、長野県の会社に約3年間勤務。退職後の2016年3月、協力隊員としてインドに赴任。18年3月に帰国した後、スウェーデンの大学院に進学。

自動車整備 × ベナン

大野辰徳さん
（2015年度4次隊）

実習の授業を行う大野さん

板書を教科書代わりに冷却装置の講義を行う大野さん

大野さんにとって協力隊とは？

「新たな故郷、新たな繋がりに出合えた旅」

大野さんの配属先は、ベナンの地方都市にある職業訓練校。自動車整備コースの授業を一任されたが、着任当時、同校には教科書も実習車もなかった。かろうじてストックされていた工具や部品を教材に、その使い方や機能などを説明することから授業をスタート。着任して半年ほど経つと、他校から教科書が提供され、さらに外部から修理を求めて車が持ち込まれるようにもなり、それらが授業の幅を広げてくれた。

任期の最後の半年、大野さんはぜひとも生徒たちに伝えておきたい技術として、「自己診断機能」の扱い方を伝えることに力を入れた。ベナンで走る車は、すでにこの機能が各部に備わっている型式のものが大半だった。ところが、この機能で特定された故障箇所を読み取る機械は高価であり、国内では普及していなかった。そうしたなかで大野さんは、その機械を使わずに故障箇所を読み取る、半ばアナログの「裏技」を伝授。教え子たちが卒業後、同国で自動車整備の仕事に就いた際に必ず重宝される技術だった。

おおの・たつのり●1988年生まれ、北海道出身。専門学校で自動車整備士の資格を取得した後、約7年間にわたり自動車整備士として働く。2016年3月、協力隊員としてベナンに赴任。18年3月に帰国。現在は、日本車の輸出なども行う自動車の商社に勤務。

理科教育 × ルワンダ

橋富加奈さん
（2015年度1次隊）

ムラサキキャベツを指示薬として水溶液の酸性／アルカリ性を調べる実験の授業を行う橋富さん

中学1年生の化学授業で講義を行う橋富さん

橋富さんにとって協力隊とは？

「一人前の人間になる修行ができた2年間」

橋富さんの配属先は、ルワンダの地方農村部にある中等学校。求められていた活動は、化学の授業を分担しつつ、「実験授業」に慣れていない化学担当の同僚教員にその要領を伝えること。しかし、自身が実験授業を受けたことのない同僚教員は当初、その実践に二の足を踏むばかりだった。

任期の前半、橋富さんは「学級崩壊」という壁にも直面する。授業で生徒たちの私語が止まらなくなったのだ。現地の教員が用いる「体罰」には抵抗があったことから、橋富さんは改めて生徒の顔と名前を一致させ、生徒との「一対一」の関係づくりを心がけるなどの対策を試みる。すると、次第に生徒たちの授業態度も上向いていった。

「学級崩壊」には思わぬ副産物があった。生徒をコントロールするためのフォローに入ってもらった同僚教員が、そこで橋富さんの行う実験授業の進め方を目の当たりにすることとなり、その実践への意欲が向上。やがて、自らが主体となって実験授業にチャレンジするようになってくれたのだった。

はしとみ・かな●1992年生まれ、東京都出身。大学を卒業した2015年の7月に協力隊員としてルワンダに赴任。17年6月に帰国。現在は環境に関する装置を製造・販売するメーカーに勤務。

観光×エクアドル

石原裕介さん
（2015年度2次隊）

現地の観光資源を調べるために
先住民「キチュア」のコミュニティを訪ねた石原さん

石原さんにとって協力隊とは？

先住民「キチュア」のコミュニティで
エコツーリズムに関する講習を行う石原さん

「現地の人々と共働する国際協力の最前線」

石原さんが配属されたのは、エクアドル・パスタサ県の観光課。同県は大半をアマゾンの森林が占め、貴重な動植物が見られるジャングルのエコツアーが観光業の柱となっている。石原さんが取り組んだのは、その活性化だ。

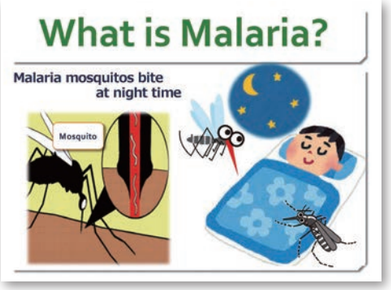
当初は、日本人観光客を誘致する道を探った。しかし、「アマゾン」と聞いて日本人が想起する国はブラジルが一般的。思うような結果は出なかった。

そこで石原さんは、それまで海外からの観光客のメインだった英語圏やスペイン語圏の国からの観光客を増やす活動に力を入れることにした。そのひとつとして、アマゾンの森林で暮らす先住民を対象に、エコツーリズムに関する講習を実施。地域の自然や文化を守っていけば、より多くの観光客を呼ぶことができ、その収入は地域の自然や文化を守ることに役立つ。そうした「観光と環境の両立」について伝える講習だ。その意義に配属先の同僚たちが賛同。彼らの発意で、ほかの村々でも同種の講習が実施されるようになっていった。

いしはら・ゆうすけ●1985年生まれ、東京都出身。学習院大学を卒業後、タンザニアの旅行会社に勤務。2014年、英国で観光学修士号を取得。15年10月、協力隊員としてエクアドルに赴任。17年10月に帰国。現在、ウェリントン・ヴィクトリア大学大学院博士課程在籍。

感染症・エイズ対策×パプアニューギニア

島 悠樹さん
（2015年度8次隊）



島さんが作成した紙芝居教材のうち、
マラリアについて解説するパートのページ例

島さんにとって協力隊とは？

学校の教員を対象に、紙芝居教材の
概要や使用方法を説明する島さん（右端）

「自分を優しく、そして強くしてくれた逆境」

島さんの配属先は、パプアニューギニア・ミリンベイ州の基幹病院であるアロタウ総合病院の公衆衛生部門。同国ではマラリアや結核をはじめとする感染症の罹患率の高さが課題となっているなか、その解決に向けた住民への啓発活動の活性化に取り組んだ。

交通手段の制約や人員不足から、配属先の同僚たちが学校や地域に赴いて啓発活動を行うことは難しかった。代わりの担い手として島さんが着目したのは、学校の教員たちだ。折に触れて、児童・生徒たちに感染症に関する講習を行ってもらおうと考えた。

専門知識がない彼らにも独力で講習ができるよう、島さんは紙芝居形式の教材を作成。出来上がると、それを持って学校を回り、最初は島さん自身が児童・生徒を相手に講習を実演。それを教員たちに見てもらい、以後は彼らに講習を担ってもらった。すると、最初に回った4校では、感染症に関する知識を問う筆記テストの点数が平均で25パーセント上昇。その後、任期中に50校近くへの配布が実現した。

しま・ゆうき●1990年生まれ、大分県出身。同志社大学を卒業後、ロッテ商事（株）に入社。退職後の2016年3月、協力隊員としてパプアニューギニアに赴任。17年12月に帰国。

料理×モロッコ

露口聖代さん
（2015年度2次隊）

配属先の教え子たちと
露口さん（後列中央）

露口さんにとって協力隊とは？

現地の食材でつくれる
日本食を地元のスーパ
ーマーケットで紹介す
る露口さん（左）

「和食で広がるモロッコの輪」

露口さんの配属先は、モロッコ国民共済事業団が運営するタブラ社会自立促進センター。経済的に困難な状況にある青年を対象に、各種職業訓練を行う施設だ。露口さんはその料理コースで、料理や製菓の指導、生徒の実習先や就職先の開拓などに取り組んだ。

力を入れた活動のひとつは、就職時の付加価値を増すために「日本食」の技術を教えることだった。地元のさまざまな飲食店を回ったところ、日本食がつくれる人材のニーズが高いことは確認できた。しかし、実習で使う食材を調達する資金が配属先にはなかった。そんななか、生徒の実習先だったスーパーマーケットから依頼を受け、店内で生徒たちと共に「寿司」のデモンストレーションを実施。それをきっかけに、以後、その店が実習に必要な食材を支援してくれることとなり、日本食の指導がスタート。一方で露口さんは、住民に日本食を身近に感じてもらえるよう、実習でつくった料理のレシピ本をつくり、そのスーパーマーケットで客に配布する活動も行った。

つゆぐち・まさよ●1990年生まれ、三重県出身。奈良佐保短期大学生活未来科食物栄養コースを卒業後、保育園で3年間、栄養士として給食調理や献立作成、食育活動などに従事。2015年9月、協力隊員としてモロッコに赴任。17年9月に帰国。

剣道×セルビア

公文ひとみさん
（2015年度2次隊）

公文さんが指導した
セルビア女子代表チームの稽古

公文さんにとって協力隊とは？

欧州剣道選手権大会で準優勝を遂げた
セルビアの女子代表チームと公文さん（左から5人目）

「人生後半への転機と自信を与えてくれた存在」

公文さんの配属先はセルビア剣道連盟。首都ベオグラードの数カ所にある剣道クラブの巡回指導にあたったほか、女子代表チームの監督も務めた。

着任当時、女子の剣士は層が薄かったことから、公文さんはクラブを超えた女性対象の稽古会を週に1度のペースでスタート。やがて、参加者たちには「共に切磋琢磨しよう」という意識の薄さが見えてきたため、公文さんは稽古の後に一緒にお茶を飲みに行ったり、お好み焼きを振る舞うパーティーに招いたりして、チームワークの醸成に注力した。すると、その後結成した女子代表チームは抜群のチームワークを見せ、欧州剣道選手権大会の団体戦で準優勝を収めたのだった。

任期の終盤には、国際大会に向けた男女混合の集中練習会も開催。そこでは若手リーダーの育成にも努めた。彼らが主力となった代表チームは、公文さんの帰国直後に行われた世界剣道選手権大会の団体戦で男女ともベスト8入り。男女の若手リーダーたちは敢闘賞を受賞したのだった。

くもん・ひとみ●1968年生まれ、高知県出身。大学卒業後、公立中学校の英語科教諭に。剣道6段。勤務校では剣道部の顧問を務めた。2015年9月にシニア海外ボランティア（※）としてセルビアに赴任。17年9月に帰国し、現在はスイス・レザンの高校で寮母を務める。

※派遣名称は派遣当時のものです。

応募までの

To-Do リスト

JICA海外協力隊への応募に至るまでにやらなければならない基本的な事柄を列挙しました。各項目の詳細はJICAのウェブサイトでご確認ください。また、JICAボランティア事業の概要や問い合わせ先については、P34〜36をご参照ください。

応募資格

- □ 年齢条件（応募期間最終日の年齢が基準）がクリアできる応募期を確認する。
- □「日本以外の国籍を持つ」「裁判が係属中」「破産手続き中」「日本以外の滞在資格を持つ」のいずれかに当てはまる場合は、応募前にJICA海外協力隊募集事務局に連絡する。

職種・案件

- □「長期／短期」「一般案件／シニア案件」のいずれの派遣区分に応募するかを決める。
- □ 派遣区分に応じて、応募する職種／案件を決める。「長期・一般案件」は職種への応募、「長期・シニア案件」は案件への応募（複数職種可）、「短期」は案件への応募（複数職種不可）。

家族・職場

- □ 選考の合否通知文書は応募者調書の「家族連絡先欄」に記載された住所に郵送されることから、海外在住の場合などは記載住所に住む人に連絡をしておく。
- □ 現職参加を希望する場合は、職場に相談し、派遣に向けた調整を進める。JICAから派遣の推薦を行うことはありません。

体力

- □ 日本とは異なる環境で暮らすうえで支障となる傷病の治療を行う。
- □ 日本とは異なる環境で再発／悪化する可能性のある疾患（高血圧症など）については、主治医に相談しておく。
- □ 規定の有効期限内に健康診断を受け、応募時に提出する健康診断書（指定様式）を作成する。

語学力

- □ 希望する案件の選考指定言語（英語／フランス語／スペイン語）につき、指定の検定試験で必要なレベルのスコアを取得する。最低限必要なレベルは、英語の場合、「TOEIC®のスコアが330点以上」などとなっています。
- □ 検定試験の結果を証明するもの（語学力証明書）を入手する。

技術力

- □ 希望する案件で求められている技術・免許を習得・取得する。
- □ 希望する案件で求められている経験（実務経験・教員経験・指導経験・競技経験）を積む。

お金

NOT NECESSARY

- ☑ 長期派遣の場合、派遣中に現地で必要となる費用については国ごとに定められた金額の手当が支給され、日本国内でかかる費用については定額の手当が支給されるため、自前の準備は不要です。ただし、扶養家族の有無による国内手当の増額はありません。

社会保険 etc.

NOT NECESSARY

- ☑ パスポートは「公用旅券」での派遣となるため、その取得の手続きはJICAで行います。ただし、短期派遣では、ご自身のパスポート（一般旅券）での派遣となる場合があります。
- ☑ 選考に合格した後には、「年金」「健康保険」「住民票」「予防接種」などの対処が必要となりますが、そのやり方は選考後にJICAが案内いたします。

情報

- □ JICAボランティア事業全般について、JICAのウェブサイトなどで情報を入手し、整理しておく。

NOT NECESSARY

- ☑ 各派遣先の治安状況・交通状況・健康管理に関する情報は、着任時のオリエンテーションなどで最新かつ正確な情報を提供します。

「選考」のアピールポイント

JICA海外協力隊の選考は、書類による「一次選考」と、面接・健康診断（健康診断書）による「二次選考」の二段階。
合否を決める際に選考担当者が着目するポイントをご紹介します。

一次選考（書類審査）

種　類	判定内容
●応募者調書 ●応募用紙 ●職種別試験解答用紙　●技術調書 ※職種別試験がない職種もあり	技術面で要請に対応可能であるかを判定
●語学力証明書	語学面で活動と生活に支障がないかを判定
●問診票　●健康診断書	健康面で活動と生活に支障がないかを判定

ここがアピールポイント！

ご自身の経験･経歴を正確かつ具体的に記載し、それらから「どんな活動に対応可能なのか」「どんな活動を現地で行いたいのか」「活動に関する強みと弱みは何か」などをご自身の言葉で書き、積極的にアピールしてください。協力隊に関する情報収集を含め、参加に向けた準備をしっかり行っていけば、志望動機も確固たるものとなり、意欲や情熱もさらに高まるものと思われます。

二次選考（面接）

種　類	判定内容
人物面接 （約15分／個人面接）	「応募の動機」「現地で行いたいこと」「経験や経歴から現地でできること」「帰国後の進路への考え」などを質問し、積極性や適応力、協調性など、協力隊としての適正を判定
技術面接 （約15分／個人面接、対象外のケースもあり）	要請内容に関する知識や経験を質問し、技術面で対応可能であるかを判定。職種によっては実技や作品の提示を求める場合も

※人物面接と技術面接を同時に行うなど、面接の時間・形態が異なることもあります。

ここがアピールポイント！

面接では以下の項目を総合的に判断し、いずれかに比重を置くということはありません。普段の人柄を自然体でアピールし、質問に対してご自身の言葉で説明することが重要です。一次選考の書類の情報も合わせて判断します。

❶「ボランティア」としての資質があるか（応募の動機、意欲、柔軟性、協調性、異文化への適応力などから判定）
❷技術や知識、経験が活動可能なレベルか
❸語学力が活動と生活に支障ないレベルか

［選考担当者から］

JICA海外協力隊ウェブサイトを積極的に活用してください！

応募に関して受ける相談で多い質問は、「職種選び」についてのものです。職種選びで迷ったときは、ご自身の経験・技術を振り返り、しっかり整理したうえで、JICA海外協力隊ウェブサイトの「シゴトを探す／職種選びのヒント」のページをチェックしてみてください。また、「現地で自分に何ができるのか、何がしたいのか」を具体的にイメージすることも大切です。

応募にあたって不安や疑問がある場合、ご自身の中で解決しておくことも大切ですが、ご家族など周りの方が不安や疑問を持っている場合もあります。そうした方々の理解を得るためには、JICA海外協力隊ウェブサイトの「ご家族の方へ」のページなどが参考になるでしょう。

派遣先で力を発揮するために何より大切なのは「健康」。応募を決めたら、日頃から健康に留意し、どのような国・環境でも対応できる体力をつけておきましょう！

［JICA海外協力隊ウェブサイト］

訓練所に入る前

派遣前訓練でスムーズな学習を可能にするために、訓練所に入る前にインターネット上での語学の事前学習や、技術・技能の向上のための研修制度を設けています。

[語 学]

事前学習…インターネット上で学べる語学教材（eラーニング）などを用意。

[技 術]

技術補完研修（対象者のみ）…受入国からの要請に的確に応えることができるよう、実務的な技術・技能の向上および教授法習得のための研修を実施。

講座事前学習…JICA海外協力隊として国際協力活動を行うために、必要な基本知識をインターネット上で学べるように教材を用意。

合格

派遣前訓練

（長期派遣者向け）

派遣前に実施される訓練では、現地で円滑な活動を行えるよう、語学講座をはじめ、安全・健康管理意識や異文化理解を促進する内容の講座を用意しています。訓練期間は約70日。訓練は集団合宿制で、長野県の駒ヶ根訓練所、福島県の二本松訓練所のいずれかで行われます。（16ページで訓練所スタッフを紹介しています）

[語 学]

現地での活動と生活に必要な語学力を身につける語学講座。6人程度の少人数クラス制で、ベテラン講師による語学の特訓を集中的に行う。

語学講座数＝約210コマ（1コマ＝50分）※

※語学力や過去のJICA海外協力隊経験の有無など、一定の要件を満たす場合には、語学訓練免除者向けの派遣前訓練を受ける場合があります。

[語学以外の講座]

内容は、「活動手法」「社会的多様性理解・活用力」など。これによりJICA海外協力隊に求められる「国際協力・JICAボランティア事業の理解」「使命感」「主体性」「協調性」「実務能力」「異文化（他者）理解・適応力」「危機管理能力」などの強化を図る。

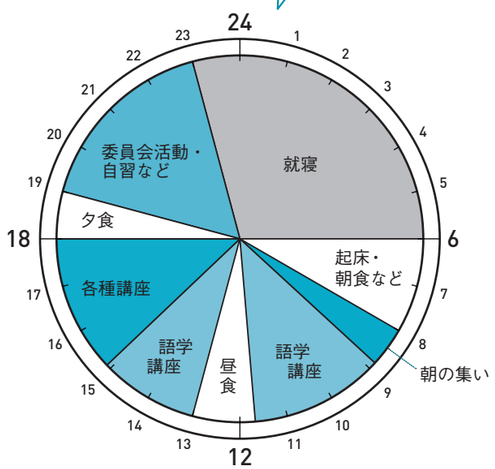
[健康（講座以外）]

訓練所は診療所を設けており、看護師が常駐し、カウンセラーも配置。また、派遣国の感染症・伝染病を予防するための予防接種を実施している。

JICAのバックアップ体制

JICAでは、派遣前・派遣中・帰国後の各段階で、JICA海外協力隊をバックアップしています。ここではその主なものを紹介します。参加への不安が少しでも軽減されるよう努めています。

Aさんの訓練所での1日



派遣中

現地に設置されたJICA事務所（※1）が安全面・健康面を含めて支援を行います。（17ページでJICA事務所スタッフを紹介しています）

[語 学]

派遣国に到着後、訓練所で学んだ語学を実践的なものにするため、ホームステイをしながら語学を学び、生活に慣れる期間が約1カ月設けられる。

[技 術]

各分野の技術に精通している技術顧問（※2）を青年海外協力隊事務局（＊）に配置。隊員が技術面で困難な問題に直面した際に、アドバイスを得ることができる。

[経 費]

赴帰任の旅費、現地生活費、住居費（派遣国から適当な住居の提供がない場合）などは、JICAが負担。

[安 全]

現地の治安状況や犯罪防止策、交通安全対策、公共交通機関利用時の注意などの情報提供のほか、通信連絡手段の確保、必要に応じて住居の防犯対策強化を行うなどあらゆる面から安全をサポート。

[健 康]

在外健康管理員（日本の看護師免許取得者）を配置し（※3）、健康管理に関する相談、病気・医療情報の提供、現地医療事情の調査、傷病発生時の対応を行う。また、必要に応じて現地医師と顧問医契約を結んでいる。

※1 派遣国の業務の規模により、支所となる場合があります。
※2 職種によっては配置がない場合があります。
※3 派遣国によっては配置されていない場合があります。
＊青年海外協力隊事務局…JICAボランティア事業の実施機関。日本のJICA本部（東京・千代田区）にある。

帰国後

進路開拓を支援する制度などを設けています。

[進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の配置]

就職・進学をはじめとした各種情報の提供や、帰国後のキャリア相談に対応する人員を全国に配置。

[自治体・企業向け帰国報告会・交流会の実施]

帰国隊員の採用を前向きに考える自治体および企業が集まり、帰国隊員と交流する会を開催。この会がきっかけで就職が決まる人も。

[進路情報ページによる情報提供]

国際協力キャリア総合情報サイト「PARTNER」で帰国隊員用の求人情報を提供。

JICA海外協力隊経験者等優遇措置

近年、JICA海外協力隊の経験を評価する自治体、教育委員会、大学が増加しています。協力隊経験者に対し、特別選考制度を設けている自治体や教育委員会、また入試などで優遇措置を取っている大学・大学院については、JICA海外協力隊ウェブサイト内の「JICAの支援制度」をご覧ください。

[教育訓練手当の支給]

帰国後の進路開拓に役立つ技術・技能の習得または免許・資格の取得につながる教育訓練に対して、JICAが支援金を支給。

[帰国後研修の実施]

帰国後の進路開拓・現職参加者の職場復帰・社会還元に役立つ内容の研修を実施。

※詳しい制度については、JICA海外協力隊ウェブサイト内の「JICAの支援制度」をご確認ください。
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html

サポーターズボイス

JICA海外協力隊の活動・生活をサポートするJICAスタッフ。特に密接にかかわるのは、派遣前に語学などの訓練を受ける日本の「訓練所」と、隊員として派遣国に到着し、最初に訪れる場所である「JICA事務所」のスタッフです。JICA事務所は、派遣国でのJICA業務全般の窓口で、現地出先機関として業務を総合的に実施しています。今回は、福島県にある二本松青年海外協力隊訓練所と、南米にあるボリビア事務所を例に、スタッフがどのように隊員をサポートしているのかをご紹介します。

海外で隊員を支える JICAボリビア事務所

ボリビア事務所は、ボリビアの政治上の首都であるラパス市にあります。ラパス市はアンデス山脈の一角で、市の中心地は標高3600メートルになりますが、事務所がある南部地域は標高約3200メートルで比較的高地の影響が少ない地域にあります。山間部の盆地に市街地が点々と広がるため、市街地間の移動としてロープウェイ網が重要な交通手段として発展しています。

ボリビア事務所次長
秋山慎太郎

主な業務はJICAスタッフの安全管理・事業管理・総務ですが、隊員の着任時には、安全の心構えや事業の説明をしています。また、隊員の活動報告書や報告会などを通して進捗を確認、活動の進め方などについても助言します。活動先スタッフとの関係づくりについても具体事例を挙げてアドバイスしています。

活動への助言・活動進捗のモニタリング

企画調査員（ボランティア事業）
西山さくら

ラパス市では、横断歩道の模様に似たシマウマが交通マナー啓発をしている。そのボランティアをしたときの様子

隊員が生活基盤を整え、活動が円滑に進められるよう、隊員経験者だった知識を生かし、支援を行っています。定期的に隊員の配属先への訪問を行い、活動の視察や配属先の意見を確認しています。生活や活動についての相談を受けた際には、一緒に問題を整理し、隊員自身が解決策を考えられるよう支援しています。

活動支援・生活相談対応

健康管理員
濵口陽子

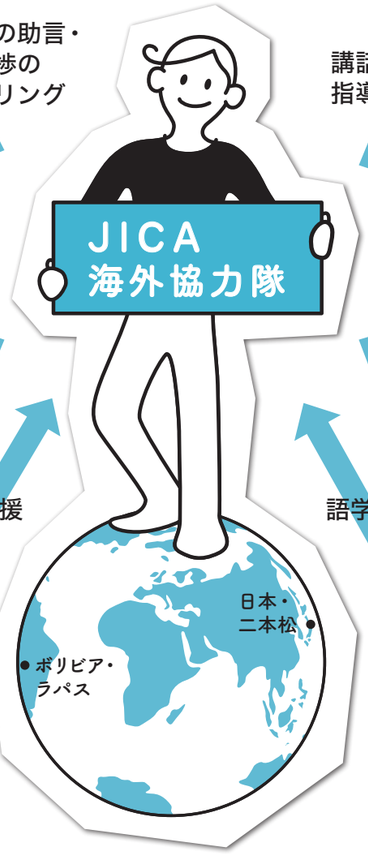
JICA関係者の健康管理のサポートをしています。隊員には日常的な健康相談の対応として、症状への対処方法の助言や受診サポートをしていることに加え、健康診断への同伴もしています。健康に関する情報の発信もしており、各人にあった健康管理方法が確立できるように意識しています。

健康相談への対応・健康診断への同伴

ナショナルスタッフ（ボランティア事業担当）
Carmen Silva

隊員の着任と帰任業務の補助や、隊員の受入機関との連絡や調整などの手続き、隊員の住居や現地語を学ぶための手配などをしています。隊員の受入先の関係者と連絡を取ることで、隊員の活動への協力体制を整え、隊員が成果を出しやすい活動環境を得るための支援ができるように心がけています。

活動支援



日本で隊員を支える JICA二本松青年海外協力隊訓練所

二本松青年海外協力隊訓練所は、磐梯朝日国立公園内、日本百名山のひとつ安達太良山の山腹に位置し、自然豊かなところです。自然が大好きな人、大都会に疲れた人には、心が癒やされる場所だと思います。

二本松青年海外協力隊訓練所所長
洲崎毅浩

訓練や地域連携に関する業務の計画策定と実施監理など業務の総括をしています。隊員候補者が受ける講義のひとつで、隊員としての心得やケーススタディを伝えています。また、規則違反者への説諭、候補者の誤解・不満への対応もしています。

講話・指導面談

診療室看護師
大里郁子

協力隊時代の実話を入れ込んだオリエンテーションで「病気や怪我のリスクはみんな平等にある」「薬の準備や予防意識を向上させることで防げることもある」と伝えています。傷病対応では原因と対策を相談者自らが考えて選択していけるように心がけて対応しています。

予防接種の実施・傷病対応・健康オリエンテーション

日本最大級の菊の祭典が行われる二本松市のご当地キャラ「菊松くん」

訓練2班担当
中村 岳

隊員候補者の生活班（※）を担当し、訓練期間中の生活面をサポートしています。私も隊員経験者のため、その経験を生かし、訓練中の個別面談などを通して候補者の目標管理指導や悩み相談に応じています。各種講座のレポートやテスト結果を確認し、必要な助言も行っています。

生活サポート・各種講座

語学講師
EDIZAL

派遣国における協力活動に必要なインドネシア語を教えています。隊員候補者が積極的に学習に取り組めるように楽しい授業をしたり、動機付けをしたりなど、語学力を最大限に伸ばすことができるように支援しています。候補者の語学力が伸びず悩んでいるときには、習得方法を助言します。

語学習得支援

※生活班…訓練中の共同生活を円滑に運営するため、隊員候補者は10数人で班を構成。班長や食事当番など役割分担をする。

JICAボリビア事務所からのメッセージ

地形や気候の変化だけではなく各地域の文化や習慣にも特徴があるボリビア。派遣された隊員の皆さんは、多様な文化に触れ、さまざまな価値観を学びながら活動し、日本に帰国後もその経験を生かして活躍されています。ボリビアは日本人にとってホッとするような文化や習慣も持ち合わせており、非常に親日的です。そのため、任期終了後に戻って来られる隊員も多くいます。これから応募を考えている皆さんには、ぜひこの魅力溢れる国を体験していただければとスタッフ一同願っております。ボリビアへは1978年に最初の青年海外協力隊が派遣されましたが、40周年となる2018年には多くの方々から感謝の言葉をいただきました。50周年に向けて、ボリビアの発展を支え、日本とボリビアの絆を深めていく多くのJICA海外協力隊の皆さんの到着を心待ちにしています。

JICA二本松青年海外協力隊訓練所からのメッセージ

開発途上国の人々の役に立ちたい。皆を笑顔にしたい。平和な世界をつくりたい。皆さんは、その「熱い想い」を持っていることを誇りに思ってください。JICA二本松の派遣前訓練は、皆さんを隊員としての「型」にはめるものではありません。70日間の集団生活を通じて互いに切磋琢磨し合い、ご自身も気付かずに持っていた「隊員としての素質」を磨き、「実践できる力」を引き出すためのさまざまな課業をご用意しています。JICA海外協力隊員に「なる」ことが目的ではなく、隊員になって「何をするか」、隊員活動を終えて帰国した後に「何をやりたいか」を考えて行動できるフロンティア人材を育成する。このために、隊員経験のあるスタッフと豊富な経験を持つ語学講師たちが皆さんをお待ちしています。

青年海外協力隊　コスタリカ

JICA海外協力隊の「やりがい曲線」

～苦あれば楽ありの2年間～

やる気十分！で活動に着手しても、異なる環境と文化の中での生活・活動では、ときに悩み、涙し、笑い、喜ぶ、想定外の日々が待っています。隊員たちの「やりがい」は、派遣中にどのように変化したのか、3人の事例を紹介します。

成功も失敗も自分次第。作業療法士としてコスタリカに残せたもの

大島（おおしま） 愛（あい）さん
（コスタリカ・作業療法士・2016年度1次隊）

自助具を使った食事訓練の補助をする大島さん

海外で生活をしてみたいという憧れがあった大島さんは、作業療法士として日本で病院に勤務したのち、海外で生活していた。充実した生活の一方、自身の技術を使って海外で働きたいと協力隊に参加した。

カリブ海に面するコスタリカのグアシモ市は自然の多い、のどかな市。同市にある特別支援学校に大島さんは配属された。約180人のさまざまな障害のある生徒が通っているが、車椅子や姿勢補助具などの道具の供給が不十分で、授業中に姿勢がうまく保てない生徒が多くいる。貧しい家庭も多く、道具の購入も難しいため、廃材を使った道具の作成が必要とされていた。

配属直後、大島さんは教室を周り、生徒の観察や評価を始めたが、生徒数が多く課題の設定に悩み、また環境や言葉にも慣れていないことで、先が見えずに落ち込んでしまう。しかし、言葉がうまく通じない分、物づくりなどできることを進めていくうち、環境に慣れていくことができた。

半年が経ち、活動先の様子がわかってきたところ、小学校に上がってもオムツをつけている生徒が多いことを感じた。「早急に対応しなくては」と、オムツ外しを目標としたトイレトレーニングのプロジェクトを開始。計画を教員に説明したが、うまく伝わらず、教員のやる気も今ひとつ。ひとりで活動をしていた大島さんは行き詰まりを感じ始める。

そこで、言語聴覚士の同僚に協力を依頼したところ快諾。その動きを見た校長が他教員に働きかけてくれ、プロジェクトが進むようになった。「ひとりでは目標は達成できないことを実感した」と大島さん。結果として半年で33人中7人の生徒がオムツを外すことができたという。トレーニングの成果に加え、活動当初から実施した廃材を利用した自助具なども定着し、先生からの依頼も受けるように。地道にやってきたことが少しずつ形になり、活動は充実していった。

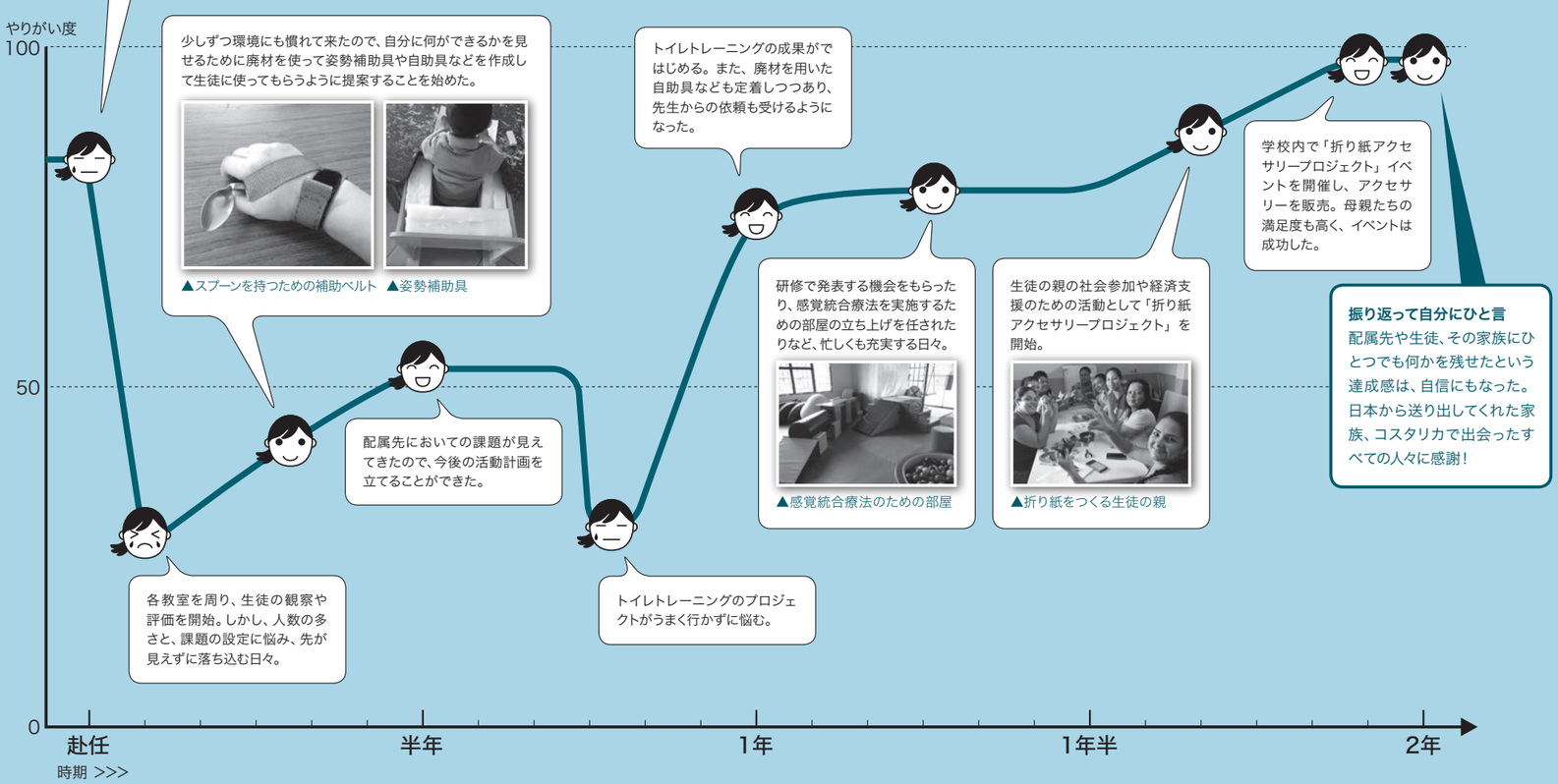
持続する活動を残すために

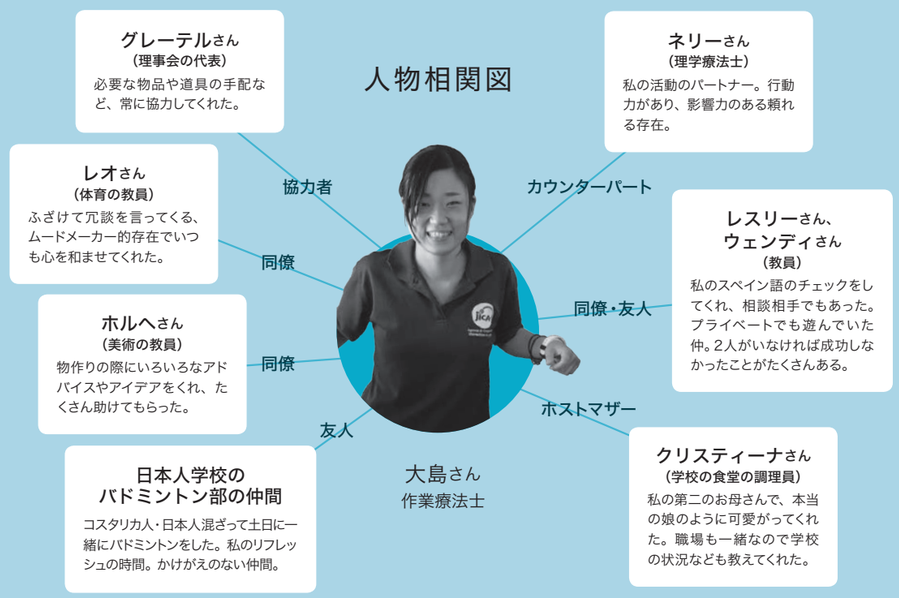
任期は残り半年。要請にあった廃材を使用した道具の作成や、トイレトレーニングのガイド作成など残せるものはできたが、まだ他にも何かできないかと、大島さんは生徒の親の社会参加や経済支援のために「折り紙アクセサリープロジェクト」を開始。生徒の母親に折り紙を教え、低コストでできるアクセサリーを作成、販売するというものだ。同僚と協力し、販売イベントを開催したところ、売り上げは上々。母親たちは、イベント後も作成を続けていってくれるという。2年を振り返って大島さんはこう話す。

「困難も、課題を見つけて解決することも、目標を達成することも、すべては自分の行動の結果として表れるというのが楽しくもあり、プレッシャーでもありました。旅行や留学では決してできなかった経験なので、本当に参加してよかったと思います」

活動最初の1週間を振り返る

数日間はカウンターパートと一緒に学校を見学。しかし、語学力不足により話をきちんと理解できず、疑問があってもなかなか聞けず……自分が何のためにここに来たのか、これから何ができるのか不安になりました。配属先にいる隊員は自分ひとりなので、同期隊員や他隊員がどんな状況かわからず、焦る部分もありました。しかし、「皆ぶち当たる壁だ」と思って、できることを頑張ることに！ 言葉が通じなくては自分のやりたい活動もできないと思い、スペイン語の専門用語の単語集や基本的なスペイン語を家で必死に勉強。その後は、どのような生徒がいるのかを知るため、教室を巡回してひとりひとりの障害特徴や必要なことなどをメモしていきました。





大島さんのプロフィール

1987年生まれ、茨城県出身。埼玉県立大学保健医療福祉学部作業療法学科を卒業後、作業療法士免許取得。総合病院で 4年勤務した後、フィリピン・オーストラリアへ語学留学。帰国後、訪問看護ステーションにて 1年半勤務。2016年 7月、協力隊員としてコスタリカに赴任。18年 7月に帰国。

活動概要

配 属 先：グアピレス特別支援学校
主な活動：さまざまな障害がある生徒が通う特別支援学校（生徒数約180人）で、作業療法士として、主に以下の活動を行う。
●日常生活向上のためのトイレ・食事トレーニング
●廃材を使った姿勢補助具・自助具などの作成
●家族の社会参加活動への支援

青年海外協力隊　エチオピア

自身が企画したスポーツ教室で子どもたちにサッカーを教える鏡さん

諦めずに挑戦した誰もがサッカーをできる環境づくり

鏡（かがみ） 修平（しゅうへい）さん
（エチオピア・サッカー・2016年度1次隊）

神奈川県で教員として働いていた鏡さんは、「『挑戦する姿』を生徒に見せたい」「人としての成長がしたい」と協力隊に参加。エチオピアでサッカーレベルの向上のため、サッカーの指導者としてユース年代のサッカー技術向上に取り組んだ。

エチオピアの首都アディスアベバにあるエチオピアサッカー連盟に配属された鏡さん。サッカーの指導者として、ユース選手の育成などを求められ、着任早々、U17エチオピア代表の合宿に合流した。しかし、試合が終わったあと同僚に「しばらく代表の活動はないから、ゆっくりしていて」と伝えられる。「どれくらい?」と鏡さんが聞くと、「1年半は予定がない」とのこと。当時について鏡さんは「最大の困難だった。私の活動はもう終わりを迎えたのかと絶望を感じたのを覚えています」と語る。

このままではいけないと、エチオピアのサッカー強化のために必要なことをまとめ、計画書を作成しようと考えていたとき、配属先スタッフのサラムさんから「子どもと女性に焦点を当てた活動をしてほしい」と話しかけられた。詳しく聞くと「エチオピアでは、女性には我慢が強いられる風習があり、また子どもたちはお金を払えないから、誰もサッカーをする環境づくりをしない」という。

この助言を基に考え出したのが「グラスルーツ（草の根レベル）での普及活動」だ。首都のサッカー教室で女の子だけのサッカー教室を、地方ではできるだけたくさんの子どもたちとサッカーをする「地方サッカー普及活動」の計画を作成した。これをカウンターパートに相談したところ、「協力隊員のお前だからできることだ、ぜひやってくれ」と言われ、空白になりそうだった1年半に活動を生み出し、困難を乗り越えることができた。

その計画通り、同国に派遣されている隊員仲間たちの力を借り、配属されて2カ月目に、最初のスポーツ教室を開催。その後も、首都と地方で教室を開催し、任期終了までに合計3000人以上の子どもたちに参加してもらえたそうだ。

「経験」「時間」「仲間」は私の財産

鏡さんは、協力隊に参加して、日本では得られない財産を手に入れたと振り返る。1つ目は「経験」だ。アフリカで暮らすことで、生活習慣を肌で感じ、特に手を使って食べることやグルシャといって相手に食べさせる文化に戸惑ったのも日本ではできない経験だった。また、言葉の壁などを感じたのも貴重な経験だった。

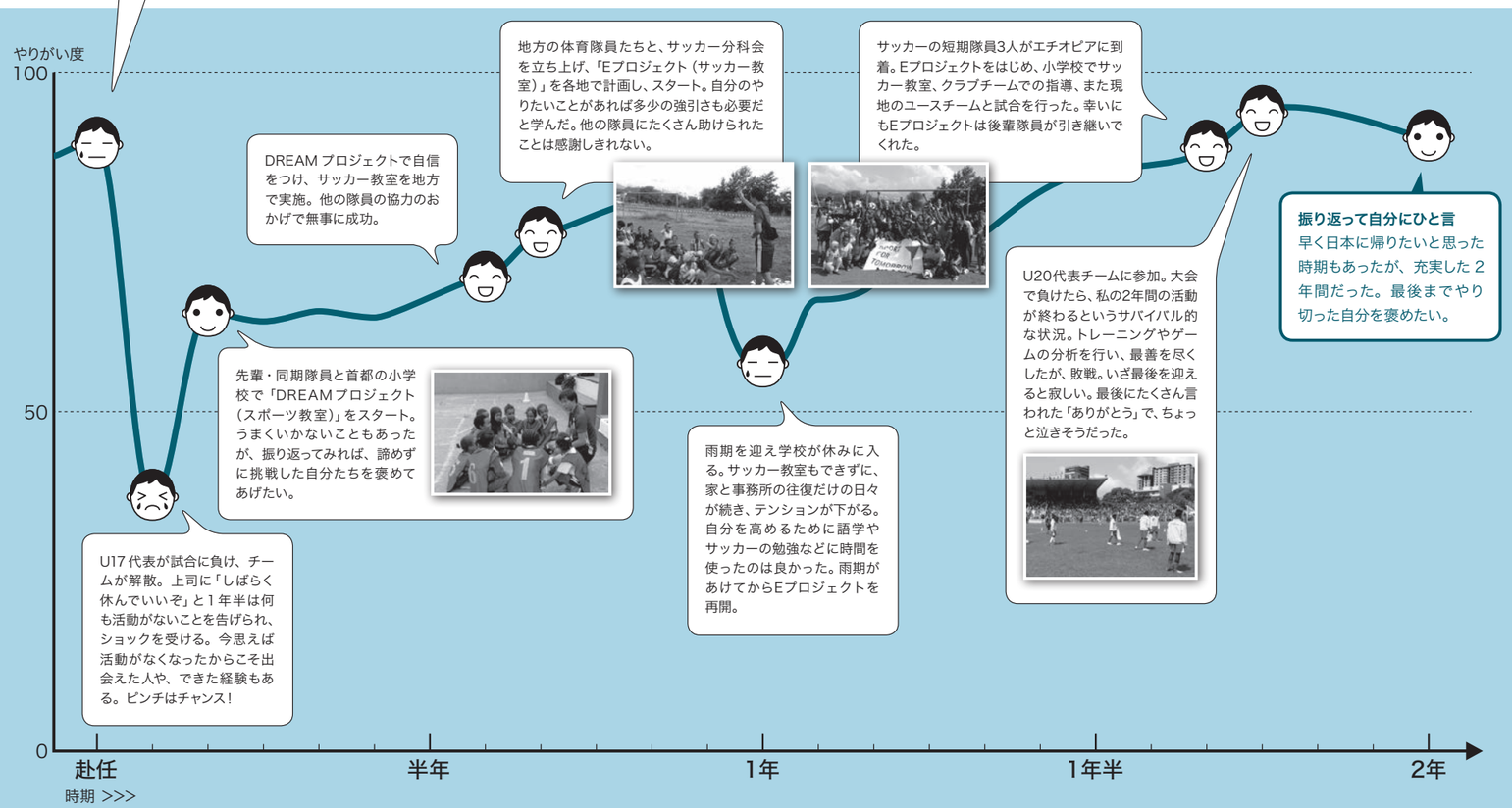
2つ目は「時間」。隊員たちと苦楽をともにした時間や、活動が停滞した時期に自分を高めるため、語学やサッカーの勉強、ギターの練習、読書、映画鑑賞の時間を持てたことで、次の活動や新しい発想につながることも知った。

3つ目の「仲間」は派遣前に二本松訓練所にいたときから感じていたという。

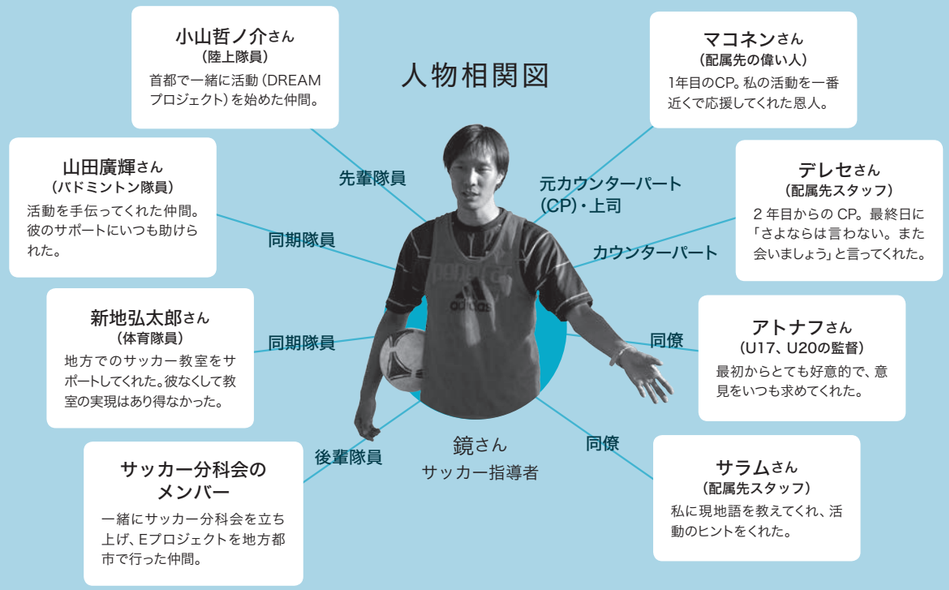
「私の年齢になってから、幅広い年齢層、人種、さまざまな経験や知識を持った仲間がこんなにたくさんできることは、協力隊に参加しなければ考えられないと思います。この2年間にかかわった仲間たちは、私の人生の財産です。今後は、得られた経験を未来ある子どもたちに還元していきます」

活動最初の1週間を振り返る

現地語はあいさつ程度、アフリカ訛りの英語にも慣れていなくて、不安でいっぱいの活動初日。配属先に行くと「特にやることはないから、コーヒーでも飲んでいて」と言われるだけ。この状態で1週間、どうすればいいのかを考えた結果、待っていても何も始まらないと、私は下手な現地語と英語を使い、とにかく配属先にいる人に話しかけました。すると、実は同僚も緊張していたこと、また上層部の決定が同僚に伝達されておらず、私がいる理由を知らないことが判明。そのうち「何ができるの?」と同僚から聞かれ、自分のできることを話したところ、「明日からU17代表の合宿に行って監督のサポートをして」と、活動が急に始まりました。



人物相関図



鏡さんのプロフィール

1985年生まれ、神奈川県出身。法政大学を卒業したのち、相模原市内の中学校に数学科の教諭として6年間勤務。2016年6月、協力隊員としてエチオピアに赴任。2018年6月に帰国。現在は、元の勤務校に数学科の教諭として復帰。サッカーは6歳からはじめ、指導歴は15年。

活動概要

配属先：エチオピアサッカー連盟
主な活動：エチオピアのサッカーレベル向上を目指し、ユース年代の強化のため主に以下の活動を行う。
●草の根レベルでのサッカー普及活動…エチオピア国内の小学校（首都12校、地方7校）で「Eプロジェクト（サッカー教室、暴力根絶活動）」を実施。
●U17とU20代表の強化…代表合宿に参加し、チームをサポート。

藤高さんからエアコンの仕組みを教わる職業訓練校の生徒たち

企業で培った技術をパラグアイで生かし地球環境を守る

藤高（ふじたか） 章（あきら）さん
（パラグアイ・冷凍機器・空調・2015年度4次隊）

ルームエアコンの研究開発に長年携わった藤高さん。地球環境保護のためには経済発展が進み、冷凍冷蔵・空調機器の普及が拡大している開発途上国の技術向上が必要であり、企業を離れた立場で援助や技術協力を行う必要があると、海外協力隊に参加。パラグアイの職業訓練局で能力強化にかかわる活動に着手する。

農牧業を主要産業とするパラグアイ。しかし近年は製造業の発展を目指し、海外の企業を誘致促進するために高度な技術者の確保を必要としていた。技術者などの育成をする職業訓練局でも能力強化が求められており、地方都市のイタにある職業訓練支局で、冷凍空調科の授業・実習支援に藤高さんは取り組むことになった。

まず、訓練局の実情を知るため、授業や実習を見学し、テキストを調査、また他の職業訓練学校の見学など、さまざまな情報を集め、課題を明確にしていった。特に課題だと感じたのは、実習用設備の不足だ。そこでエアコンの動作原理がわかる設備の導入のために活動計画を作成したところ、所長とカウンターパート*（以下、CP）から同意を得られた。設備の導入はCPと協力して進める予定だったが、協力を依頼すると了承はしてくれるものの、先延ばしにされることが続く。予定通りに物事が進まず、藤高さんは、なぜ協力してもらえないのかがわからずひとりで悩むことになる。

できることから始めようとしたが、地方都市では機材や資材が入手できず進まない。首都まで出向いて入手の可能性を聞き、見積もりを取って、必要な資材の資料を作成。しかし、所長からは訓練局の予算で資材の購入がすぐにはできないという回答。そこで、活動のために使用できるJICAの予算で資材を購入し、設備を組み立てられたのは、配属されて1年が経った頃だった。

その後も、授業や実習の補助や新しい技術が導入された製品のテキスト整備、また冷蔵庫の動作原理がわかる設備の導入などに取り組んだ藤高さん。CPとは、なかなか一緒に活動はできなかったが、彼の事情にも気づいた。正規職員でなく、授業があるときだけの契約社員で、他の仕事もあり多忙だったのだ。事情を知ったことで、確実に支援してくれる職員を見つけ、協力を得て活動は進んだ。とはいえ、根気よくCPに協力を依頼したことで終盤には少しずつ協力を得られるようになったという。

パラグアイの良さ、日本の良さ

藤高さんはパラグアイで暮らし、日本の便利さや良いサービスを再認識した一方で、日本はあまりにも効率や、便利さ、良いサービスを追求・競争しすぎるあまり、低賃金、長時間労働などにつながってしまい、生活の幸福感が低くなっているように思えた。あまり競争せず、ほどほどに働き、「トランキーロ（スペイン語：ゆっくりと）」で済ませてしまう、パラグアイ社会。日本での当たり前が当たり前ではないことも感じることができた。

「今後はパラグアイでの経験も踏まえて働きたい。そして、多くの人にボランティア活動の重要性と必要性、また退職後の活躍の場にできることを伝えたいと思います」という藤高さん。4月から大学の教員として働く予定だ。

*カウンターパート…技術協力の対象となる、派遣国の行政官や技術者、配属先の同僚などのこと。

人物相関図

藤高さん
職業訓練局での技術指導

アリーシア・オルエさん（配属先のスタッフ）
生活面の支援や活動の状況をフォローしてくれ、生活や活動の相談相手となってくれた。

エウラリオ・ギメネスさん（配属先の所長）
朝はいつも事務所にあいさつに来てくれ、健康面などを気にしてくれた。

ウゴ・ナルバエスさん（配属先のスタッフ）
活動面でいろいろな相談に乗ってくれた一番の協力者。

ブラス・カルバージョさん（配属先の先生）
まじめで幅広い知識を持ち、計画的に授業を行う尊敬すべき先生。

ユーロヒア・アグエロさん（スペイン語の先生）
スペイン語だけでなくパラグアイでの生活面でも多くのことを教えてくれた。

オスアルド・アジャラさん（配属先の先生）
冷凍機器に関する知識が豊富。しかし、いい加減な面もあり、授業をカリキュラム通りに行わないため、活動が難しくなったことも。

上司・コーディネータ　上司　同僚　同僚・カウンターパート(CP)　友人　同僚・CP

藤高さんのプロフィール

1957年生まれ、広島県出身。北海道大学を卒業した後、松下電器産業（株）〈現パナソニック（株）〉に就職し、ルームエアコンの研究開発に33年間従事。2016年3月、シニア海外ボランティア（※）としてパラグアイに赴任。18年3月に帰国。19年4月から大学の機械工学科の教員として勤務予定。

活動概要

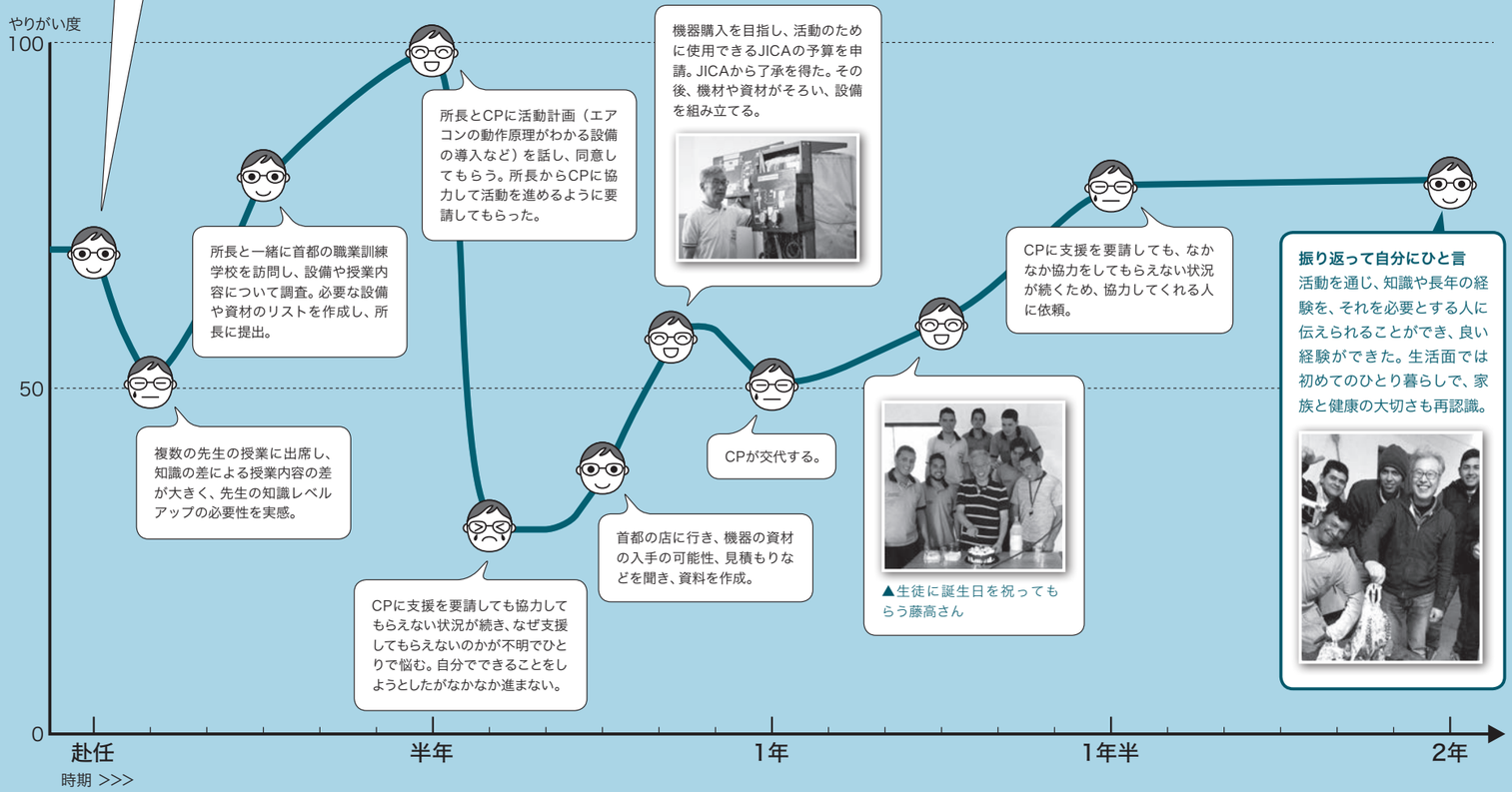
配 属 先：労働雇用社会保障省職業訓練局イタ支局
主な活動：イタ支局の冷凍空調科の授業の技術支援、実習支援として主に以下の活動を行う。
●授業内容の調査、授業・実習の補助、指導教官への改善提案
●エアコンなどの動作を理解するための設備調査、導入
●教材作成の支援

※派遣名称は派遣当時のものです。

活動最初の1週間を振り返る

配属先の職業訓練校を見せてもらったところ、実習用の設備がほとんどないことがわかり、その状況で何ができるのかを考えることから活動を開始。まずは、所員、先生と生徒たちの名前と顔を覚えるため、タブレットで顔写真を撮影、名前などをメモとして残すことに。日本から100円ショップで購入した小さいホワイトボードをパラグアイに持って行き、現地の人と話をして聞き取れない言葉を書いてもらい理解するようにしました。また、パラグアイではスペイン語だけでなく現地の言葉（グアラニー語）も混ぜた言葉で会話されるため、配属先スタッフにグアラニー語を教えてもらい、話すようにすると現地の人はとても喜んでくれました。

配属先の前で、スタッフと藤高さん（左から3人目）



JICA海外協力隊 BEFORE▸AFTER 広がる帰国後の可能性

JICA 海外協力隊に参加する人生、参加しない人生。参加を選ぶこと自体がひとつの岐路になります。どのような未来を想像して協力隊に参加し、その後の人生に協力隊経験はどう影響を与えたのか。3 人の隊員経験者の事例を紹介します。

3人の協力隊経験者に尋ねました。JICA海外協力隊の派遣前の“想像”と派遣後の“実際”

CASE 01

P24 ▸ 安川玲央さん（ヨルダン・環境教育）

想像 ▸ 未開の地でのサバイバル生活の中、先進国の知識や技術を広めることが協力隊の活動と思っていました。

実際 ▸ インフラも整備されており、何より配属先のスタッフは環境に関する専門知識が豊富。私が何かを「教える」立場ではありませんでした。その中で自分が何をしたら役に立てるのかを考え、実践していくことが重要。相手を知り、信頼関係を築き、行動する力が求められると感じました。（写真は、学生にアクティビティを実施する安川さん）

CASE 02

P25 ▸ 門脇宣幸さん（ガーナ・ソーシャルワーカー）

想像 ▸ 派遣国の人は日本のことを知っているのか、自分のことを受け入れてくれるかどうか不安でいっぱいでした。

実際 ▸ 想像以上に派遣国の人は日本のことを知っており、日本人に対しては友好的でした。今までの日本人たちが積み重ねてきた信用と実績の証なのだと思いました。日本のことをいろいろと聞かれるので、当たり前だと思っていた日本の文化や価値観について、改めて考える機会になりました。（写真は、よさこいソーランを踊るガーナの人たち）

CASE 03

P25 ▸ 遠藤かおりさん（ウズベキスタン・日本語教師）

想像 ▸ 任期が終わる頃には現地語（訓練言語）が、現地の人と同じくらいペラペラになると思っていました。

実際 ▸ そこまでペラペラにはならなかった！ 活動時は基本的に日本語のみを使用する日本語教師だから!?（写真は、遠藤さんの日本語講座を受けている配属先の大学の学生たち）

BEFORE AFTER

CASE 01

安川玲央（やすかわれお）さん
（ヨルダン・環境教育・2015年度1次隊）

BEFORE 大学生
▼
AFTER 株式会社堀場製作所 社員（海外営業部）

BEFORE

青年海外協力隊を知ったきっかけを、「小学5年時の担任の先生が元協力隊員だったこと」と話す安川さん。その影響から「いつか外国の言語や文化に触れ、世界の人々に役立つ活動をしたい」と考えた。大学で生命工学を学び、大学院に進学するかを決めるタイミングで人生を再考する。生命工学の研究はパソコンに向かう日々。この道を突き進むのか、人とコミュニケーションをとり、世界で活動する道に進むのか。悩んだ末、協力隊への参加を選択した。

配属されたのはヨルダンにある海洋保護活動をするNGO。NGOが活動する地域は環境に関する知識不足によりゴミのポイ捨てが非常に多く、海洋環境破壊が進んでいたため、安川さんは環境啓発活動を始めることになる。活動を重ねていくうち、人の意識や考え方を変える難しさを知り、「必要なのは、持続的な働きかけだ」と肌で感じたという。また、暮らしを知るほど、日本製品を海外に広めたい気持ちも高まった。それは、ヨルダンでも日本の技術の高さは認知されているが、実際には車や電化製品は韓国製、生活用品は中国製がほとんど、という現状を知ったためだ。帰国後も中東と日本の懸け橋になりたいと考え、海外展開する日系企業への就職を考えるようになった。

AFTER

帰国後、ヨルダンで経験したことを生かし、就職先を考えた安川さんが重要視した点は3つ。「理系を生かせること」「海外、特に中東で働くチャンスがあること」「コミュニケーション力を生かせること」。そんなとき帰国隊員向け求人サイトの「PARTNER」で「株式会社堀場製作所」に出会った。

同社は、自動車・煙道排ガス測定、大気汚染モニタリングなどさまざまな測定機器を扱うメーカーで、その海外営業部に安川さんは所属。ODA案件開拓に注力している。協力隊でヨルダン人と信頼関係を構築するために試行錯誤した経験が業務で生きていると感じている。

「ヨルダンでは、求められたことをひとつひとつクリアしていく中で、信頼を得ることができました。人の話を傾聴し、言うべきことは言い、多少のことでは凹まず前進する推進力、忍耐力が備わったと自負しています。それは現在の仕事にも生きています」

新しいことに挑戦する企業文化がある同社。中東エリアの仕事も増加中だ。「世界27カ国に子会社があるので、世界に出て、日本製品を広めるため、努力していきたいです。また見聞を広げることで、人としても成長し続けていきたいと思っています」

安川さんのプロフィール

BEFORE

1991年 神奈川県生まれ。
2015年 3月、東京工業大学生命理工学部生命工学科生命情報専攻卒業。
4月、東京工業大学大学院生命理工学研究科へ。
休学し、中途退学（2017年3月）

協力隊参加

2015年 6月、協力隊に参加。環境教育隊員としてヨルダンにある海洋保護活動をするNGOに配属され、環境啓発活動に取り組む。幼稚園から高校までの約20校を巡回、環境教育アクティビティを企画、実施する。その他、現地の公園での環境啓発活動や、他隊員と協力したゴミ拾いイベントの開催、環境教育ワークショップを行う。

AFTER

2017年 6月、帰国
10月、アラブイスラーム学院で正則アラビア語（フスハー＊）を学ぶ。アラビア語コンテストなどで司会を務める。
2018年 2月、株式会社堀場製作所に入社。
海外営業部配属。

＊正則アラビア語…規範的なアラビア語。主に公の場で使用される。

堀場製作所ショールームで製品の説明をする安川さん（右端）

応募を考えている方へ

不安もあるかもしれませんが、一歩踏み出すことが重要。踏み出してこそ見える世界があると思うので、勇気を出して頑張ってください。

協力隊活動

ヨルダンにあるパレスチナ難民キャンプで環境教育のワークショップを実施する安川さん

BEFORE AFTER

CASE 02

門脇宣幸（かどわきのぶゆき）さん
（ガーナ・ソーシャルワーカー・2011年度1次隊）

BEFORE　精神科病院の相談員
▼
AFTER　横浜市 職員

門脇さんのプロフィール

BEFORE

1981年　宮城県生まれ。
2004年　大学卒業後、知的障害者入所施設に介護スタッフとして勤務。
2008年　転職し、他法人で障害者のグループホームの立ち上げを担当。
2010年　精神科病院に相談員として勤務。

協力隊参加

2011年　6月、協力隊に参加。ガーナの職業訓練校・生産施設・身障者協会を対象に、生産者の収入向上や、組織の活性化に関する活動を行う。

AFTER

2013年　6月、帰国。翌年4月、社会福祉法人横浜市社会福祉協議会に勤務。
2017年　4月、横浜市瀬谷区役所高齢・障害支援課の障害担当職員に。

門脇さんの勤務先、神奈川県横浜市瀬谷区役所のある瀬谷区総合庁舎

BEFORE

高校生のとき、世界の貧困や環境問題などの課題を学び、「世界のために何かをしたい」と協力隊への参加を考えた門脇さん。自分ができる「何か」を見つけるため、福祉系の大学に進学した。卒業後は、精神科病院の相談員などとして働き、その後、協力隊を受験。合格し、ガーナへの派遣が決まった。

障害者の職業訓練校・生産施設などを配属先とし、それらの場所で、スタッフや生徒へ障害の特性に応じた活動のアドバイスや、生産施設で働く障害のある職人の収入向上支援に関する活動を行った門脇さん。特に収入向上支援では、生産地や生産物のPRに注力したことで賃金の向上に貢献できた。その反面、資金不足に悩む彼らに何度も提案した貯金計画は達成できなかった。度重なるインフレで貯金に意味を見出せないという彼らの背景を、門脇さんが把握できていなかったのだ。

「こうしてあげたいという、自分の価値観を押し付けていたんですね」

活動の一方、現地の生活を知る経験は、大きな学びを与えた。小さな町では誰もが知り合いで、あいさつを交わし合う。車椅子の人をバスに乗せるなど困っている人がいれば当たり前のように手を差し伸べる地域で支え合う生活。日常の人々の行動が心に残った。

AFTER

「日本でもそんなコミュニティをつくりたい」と、帰国後に地域づくりに携わる仕事を探し、現在は、横浜市瀬谷区役所の高齢・障害支援課に勤務している。障害担当の職員として、精神疾患のある人の支援をしており、相談窓口で、施設や入退院、生活支援、就労支援に加え、相談者を訪問して現状の把握などにも努めている。命にかかわる内容など責任の重い相談も受けるが、そんなときは協力隊で得た「自分の価値観だけで物事を判断しない」という考え方が生きているそうだ。

「途上国では必ず文化や習慣の違いに遭遇します。現在の相談窓口業務でも同じことが言えますが、そこで自分の価値基準を押し通すと、相互理解が難しくなるばかりでなく、対立を生む場合もあります。自分の価値観で物事を判断しないというのは協力隊経験により、さらに意識するようになりました」

また、自国に誇りを持ち、困ったときはお互いに助け合えるガーナの人たちから与えられた気づきは、仕事の取り組み方にも影響を与えている。

「ガーナの人たちの姿勢を踏まえ、私は行政という立場から、今後も自分たちが住んでいる地域を『好きだ』と言えるような街を、住民と共に考えつくっていきたいと考えています」

応募を考えている方へ

協力隊での経験は、物の見方や価値観、考え方や行動力、今後のキャリアプランなど色々な面で変化を与えてくれました。自分の人生の中で大きな財産になり、また成長につながります。
協力隊が気になったときというのは、今の生活の中で何かが心に引っかかっているということ。このタイミングを逃すと、次の機会はないかもしれません。心配なことは多いかもしれませんが、気になった今だからこそ、チャレンジしてみてください。

プロダクションセンターでガーナの伝統的な織物をつくる職人たちと門脇さん（中央）

CASE 03

遠藤かおり（えんどう）さん
（ウズベキスタン・日本語教師・2010年度3次隊）

BEFORE　日本語教師
▼
AFTER　日本語専門家

遠藤さんのプロフィール

BEFORE

1981年　神奈川県生まれ。
2004年　3月、大正大学文学部国際文化学科卒業。日本語教師の資格を取得。8月、独立行政法人国際交流基金の日本語教師派遣プログラム（JENESYS）などにより、ポーランド、タイ、ベトナムの高校・大学・専門学校・日本語学校で日本語教師を務める。

協力隊参加

2011年　1月、協力隊に参加。ウズベキスタンにある世界言語大学に配属され、日本語講座、日本語弁論大会、日本文化紹介イベントなどの運営に従事。

AFTER

2013年　1月、帰国。
4月、早稲田大学大学院日本語教育研究科へ進学。
2015年　4月、国際交流基金よりバンコク日本文化センターに日本語専門家として赴任。
2018年　6月から、国際交流基金よりベトナム日本文化交流センターに日本語専門家として赴任中。

＊“日本語パートナーズ”…アジアの中学・高校などで、日本語教師や生徒のパートナーとして、授業の補助や日本文化紹介などをする人材のこと。

ベトナムにて“日本語パートナーズ”への研修を行う遠藤さん

BEFORE

海外で日本語教師をするためのひとつの手段として協力隊参加が頭の中にあったという遠藤さん。大学卒業後、日本政府が進める青少年交流事業などを利用し、3カ国で日本語教師を経験したのち、協力隊に参加。ウズベキスタンの大学に配属されることになった。

大学では、日本語講座の授業や日本語弁論大会出場者への指導、日本文化紹介のイベントの運営などに従事した。学生たちは日本語の学習意欲も高く、担当する日本語講座も配属先から高く評価されており、充実した活動ができた。特に印象に残っているのは、自身が運営に携わったウズベキスタンの日本語弁論大会で、配属先の大学の代表として出場した学生が優勝したことで、これは大学初の快挙だった。

当時、中央アジアの国々には、国際交流基金から日本語教育の指導支援をする日本語専門家が派遣されており、遠藤さんも日本語弁論大会などでお世話になっていた。専門家の仕事を見て、自身も専門家を目指そうと決心したが、専門家になるには日本語教育に関連する分野の修士号の取得が必須だった。同期隊員が大学院進学を目指していたことや、修士論文の調査でウズベキスタンに来ていた先輩隊員から帰国後の進路モデルを具体的に聞いたことで、専門家への道のりが明確になっていった。

AFTER

帰国後に大学院に進学することを決め、活動の合間に進学の準備をし、帰国前にウズベキスタンから受験をした。その後、大学院に進学し、年に一度公募される、国際交流基金の日本語専門家に、在学中に「修了見込み」の立場で応募し、修了した翌月からタイに派遣されることが決まった。

現在は、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターに日本語専門家として派遣され、国際交流基金アジアセンターが行っている〝日本語パートナーズ〟＊派遣事業でベトナムに派遣されている人たちの教務支援を担当している。また、中等教育機関で日本語を教えているベトナム人教師の側面支援も担当業務のひとつだ。日本のように計画通りには業務が進まないこともあるが、そこが苦しいところであり、楽しいところでもあると遠藤さんは言う。

「『できる、できない』ではなく『どうしたらできるか』を考えていく方が前に進める気がしますし、逆境に立たされてもその状況を楽しむことができるということを、協力隊時代と協力隊になるまでの経験の中で学びました」

以前より日本語教育や日本語教師という言葉が知られるようになった今、遠藤さんはこれまでの経験を生かし、日本語を必要とする人の力になり続けられるよう、業務に取り組んでいる。

応募を考えている方へ

協力隊活動は、派遣国での活動だけではありません。派遣前訓練に始まり、帰国後もたくさんのつながりが続きます。それぞれの場面で多くの出会いと人生観が変わる出来事が待っています。「やってみよう」と思ったときがチャレンジのときです。新しい自分と出会い、成長させる時間をぜひ過ごしてみてください！

遠藤さん（左から2人目）が運営協力をしたウズベキスタン国内での日本語弁論大会。配属先の大学から2人が出場し、左端の学生が優勝を果たした

現場 CloseUp

派遣中の協力隊員が
活動＆生活をご紹介

Senegal
セネガル

青年海外協力隊

任地の情報

地名　ルーガ州ルーガ県ンギディル市
位置　首都から約180キロ（車で約4時間）
人口　約2万2000人
言語　ウォロフ語、プラール語、セレール語
産業　農業（落花生、豆類、トマト）
気候　平均気温は28度
（雨期：6〜10月、乾期：11〜5月）

どこまでも続きそうな一本道の先に、
江藤さんの任地がある

地方の農山漁村から都市部まで、JICA海外協力隊員が赴く場所は千差万別です。ここでは、3つの異なるタイプの場所で活動している協力隊員たちに、任地の概要や活動・生活の様子を紹介してもらいます。

任地

63の村々からなる市

江藤さんの任地、ンギディル市は2014年に誕生したばかりの新しい市。住民のほとんどがイスラム教徒で、モスクのスピーカーからはお祈りの時間を知らせる音が流れる。「点在している村々には、それぞれの特色があるため、いつも新しい発見があります」（江藤さん）

どこの家庭にも庭に大きな木があり、日中はみんなで木陰に入ってご飯を食べ、ゆっくり過ごす

燃料材となる牛糞を大草原の真ん中で集めるのは、村の女の子たちの役目だ

Q1　参加のきっかけは？

あるザンビア人女性との出会いから、「ビジネスを通じてアフリカとかかわることで、彼女に恩返しがしたい」という思いが生まれました。入社4年目となり、その後のキャリアや目標の実現を考えたときに、大学で学んだことが生かせ、言語が習得でき、アフリカの文化や習慣を現地の人に一番近い場所で学べるのが青年海外協力隊だと確信し、応募しました。

Q2　活動でやりがいを感じるときは？

私が村の人たちに教えた日本式の「整理整頓」の方法を、私が不在の間に自分たちでさらに改善し、実践していると人伝に聞いたとき。

江藤麻子（えとうあさこ）さん

派遣国　セネガル
職　種　コミュニティ開発
派遣年度　2017年度1次隊

PROFILE

1989年生まれ、千葉県出身。2013年に筑波大学社会・国際学群国際総合学類を卒業した後、富士通（株）に勤務。17年7月、青年海外協力隊員としてセネガルに赴任（現職参加）。

江藤さんのある日の一日

生活

テランガ※（おもてなし文化）のなかで

ンデッキ（朝食）は、フランスパンのサンドイッチ（具はゆで卵、味付けはコショウ入りマヨネーズ、約50円）とカフェトゥーバ（甘いコーヒー、約10円）を屋台でとる。携帯電話の通話や通信は可能だが、インターネットの速度は遅い。「唯一の気晴らしは、誰もいない砂利道をバイクで走っているときに熱唱することです」（江藤さん）

※ウォロフ語

06:30　起床、洗濯、出勤準備

洗濯は、セネガルでよく目にするカラフルなマーブル色のプラスチックバケツを使用。「水浴びやモノを運ぶときなど、いつでもどこでも大活躍です！」（江藤さん）

自宅はアパートの3階部分

勉強机は、家の中で最も電灯が明るい廊下に設置

間　取	2LK
電　気	有（週3回のペースで停電）
水　道	有
風　呂	よく詰まる排水溝付の水浴び場で、バケツに水を貯めて水浴びをする
トイレ	洋式・水洗式
洗　濯	手洗い

09:00　出勤

配属先はバイクで10分。途中、屋台で朝食をとるのが常だ

上：配属先の外観
下：配属先が管理する膨大な量の戸籍。部屋の壁を埋め尽くしている

09:30　活動先の村へ

村の女性たちを相手に、手洗いなど衛生に関する啓発を実施。イラストや動画を中心とした教材をつくるなどの工夫をしている

マルシェの視察。マルシェを切り盛りする女性たちと、さらなる活性化を目指して奮闘中

15:30　昼食

昼食は、招待してくれた村の友人宅で。写真はセネガル料理のチェブジェン（魚や野菜などの炊き込みご飯）。手で食べるのがセネガル式だ

17:00　村の保健所を巡回

一緒に活動を進める関係者

「たまに活動のことで言い争いをしたりもしますが、相談に乗ってくれたり、冗談を言って励ましてくれたりする同僚たちです」（江藤さん）

19:30　帰宅（途中、寄り道）

セネガル版コンビニの「ブティック」。「歴代の隊員たちも利用していたため、『tamago』と言うと、ちゃんと卵を出してくれるお茶目なお店です」（江藤さん）

21:30　水浴び・夕食

昼食は油が多めなので、夕食は野菜スープを自炊

22:00　自由時間

フランス語の学習や隊員仲間とのSNSによる近況報告

00:00　就寝

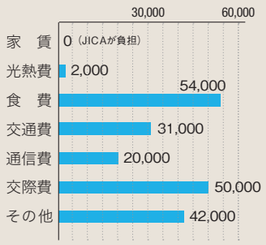
ある休日のひとコマ

近郊に住む隊員の活動を視察。布店（写真）に立ち寄り、手土産の調達を。「布を買うときは、いつもこの店で『お任せ』にします。品揃えが豊富で、店主のセンスも良いので、毎回友人に喜んでもらえます」（江藤さん）

1カ月の家計簿

※単位：セーファーフラン
（1セーファーフラン＝約0.19円）

【収入】約352,000（JICA支給のUSドルを換算）
【支出】約199,000（内訳は下のグラフ）



現地語学訓練のときから愛用している単語帳兼メモ帳。「思い出も疑問も悔しさも詰まったノートになりました」（江藤さん）

現場 CloseUp

Brazil

ブラジル

日系社会青年海外協力隊

町の中心にあるサント・アントニオ母教会。18世紀に建てられたものだ

任地の情報

地名　ミナス・ジェライス州パラカツ市
位置　首都から234キロ
人口　約9万2500人
言語　ポルトガル語
産業　農業・畜産（大豆やトウモロコシ、食肉や乳製品など）
気候　平均気温は20度前後（過去の最高気温は10月の40度、最低気温は6月の4度）。11〜3月の雨期を除いて雨は降らない。

任地

220年の歴史を持つ町

歴史的建物が並ぶ通りは非常に美しい。町の中心部にはさまざまな店があり、生活用品はそこで揃う。主な産業は農業。郊外には自然豊かで雄大な農場が広がっている。「初めて任地を訪れたとき、色々な表情を持つ素敵な場所だと思いました」（竹下さん）

❷古い建物が残る歴史的保護区
❸伝統的なブラジル料理、パモーニャ。トウモロコシの実でつくる生地を、トウモロコシの葉で包み、蒸したもの。トウモロコシの生産が盛んな任地ではよく食べられている
❹町の中心部の通り。赤と白の横断歩道は歩行者が優先

❶親交がある日系人・嶋田さんの農場が、任地で最も好きな場所。「町の外に出ると、どこまでも続いているような広大な自然に感動します」（竹下さん）

Q1　参加のきっかけは？

ブラジルを旅行で訪れた際、日本の反対の国で日本語が通じることに驚きました。また、日本人や日系人の人々との出会いをきっかけに、日本人移民の歴史と、両国の繋がりの強さを知りました。それに感銘を受け、「日本人としてできることをしたい」という思いと、「ブラジル日系社会についてより深く知りたい」という思いが生まれ、旅行から帰国後、すぐに応募しました。

Q2　活動でやりがいを感じるときは？

生徒が難しい問題に取り組み、理解して「わかった！」という反応をするのを見たとき。そのほか、授業外の時間に生徒が日本語を使って話しかけてくれたときには、嬉しくなり、やる気に繋がります。

竹下ゆかりさん

派遣国　ブラジル
職種　日系日本語学校教師
派遣年度　2017年度

PROFILE

1988年生まれ、静岡県出身。東京経済大学卒業後、民間企業に勤務。日本語教師の資格を取得した後、2017年7月、日系社会青年ボランティア（※）としてブラジルに赴任。

※派遣名称は派遣当時のものです。

竹下さんのある日の1日

生活

食から日本を感じる

竹下さんが最も楽しみなのは、同僚教員宅での夕食会。料理は日本とブラジルの「本場の母の味」が並ぶ。移動手段は基本的に徒歩だが、市街地へ行くときはバスを利用している。自宅に備え付けのWi-Fiは十分な通信速度であるため、日本の家族ともSNSを利用して通話が可能。「散髪は市内の美容院を利用しています。シャンプーが上手で優しいオーナーには、毎回癒されています！」（竹下さん）

07:30　起床、朝食、出勤準備

朝食はアグア・デ・ココ（ココナツジュース）を自宅で

アパートメントタイプの自宅。日当たりが良い点が気に入っているが、網戸がないため虫が入り込むのが難点

部屋は小さめで居心地が良い。見ると元気になるという、生徒からもらったメッセージカードや日本の友人からの手紙を飾っている。いつでも作業ができるように、教材づくりの道具はソファーに配置

08:00　出勤

上：自宅から徒歩10分の距離にある活動先の日本語学校。敷地内には移住100周年の記念碑も建てられている
右：2つある教室は、日本の学校さながらの雰囲気。特に竹下さんへの要望が強いのは「会話の授業」だ

11:30　昼食

レストランで昼食。そのあと一旦帰宅

間取	2K
電気	有
水道	有
風呂	シャワー（お湯も出る）
トイレ	水洗式
洗濯	洗濯機

14:00　午後の活動

音楽に合わせて書く「書道パフォーマンス」を生徒たちと実施。「生徒たちが興味を持ちやすいものを活動に取り入れるようにしています」（竹下さん）

一緒に活動を進める関係者
配属先の役員と同僚教員たち。同僚教員たちとは話し合いを重ねながら活動を進めている

17:00　帰宅（途中、寄り道）

品揃えが良い文房具店。授業で使用する教材の材料はここで調達する

18:00　夕食

主に自炊。日本米は任地でも入手可能なため、日本食をつくることが多い。日本から持参した緑茶（写真）で一息

19:00　自由時間

活動の準備、音楽鑑賞、ポルトガル語の勉強などをして過ごしている

23:00　シャワー

23:30　就寝

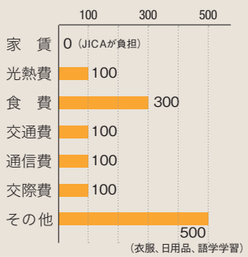
ある休日のひとコマ

上：毎週土曜日に開かれるフェイラ（市場）。竹下さんのおすすめは、日本食レストランを経営する日系人の高橋さん夫婦（写真）がつくる餃子と焼きそば
下：カフェ・コン・レイチ（カフェオレ）とポン・デ・ケージョ（チーズパン）は、気晴らしに訪れるカフェテリアでよくオーダーするもの

1カ月の家計簿

※単位：ブラジルレアル
（1ブラジルレアル＝約29円）

【収入】約2,600（JICA支給のUSドルを換算）
【支出】約1,200（内訳は下のグラフ）



ジャンタール（夕食会）で日伯文化協会の人々と巻き寿司をつくった

教材づくりの道具が入ったカゴは、日々大活躍

車とバイクにより交通渋滞が発生するのは、毎朝の光景。
周辺地域からの人口流入が続いており、昼の人口は300万人にものぼると言われる

現場 CloseUp

Cambodia

カンボジア

シニア海外協力隊

任地の情報

地名　プノンペン特別市（首都）
人口　約200万人
言語　クメール語
産業　観光業、農業
気候　モンスーン気候（雨期：5月下旬～10月下旬、乾期：11月上旬～5月中旬）

任地

活気に溢れる都市

木村さんの任地・プノンペン市はカンボジアの首都。政治・経済の中心である同市は、近年目覚ましい発展を遂げている。「大きなショッピングモールが次々とオープンし、いたるところで大規模住宅地の開発と高層ビルの建設が進められているのには驚きました。雨の日は、雨量によってはあっという間に冠水してしまいますが、地元の人たちは慣れた様子でバイクを走らせています」（木村さん）

❶国民の約9割が仏教徒といわれるカンボジア。任地でもいたるところで寺を目にすることができる

❷市内には大型スーパーマーケットがいくつもある。日系資本のものも数店舗あり、日本の米や食材も入手可能
❸所々で開かれているブザー（市場※）には、新鮮な果物や野菜が並べられている。「クメール語の練習にはもってこいです。顔馴染みになると、おまけもしてくれます」（木村さん）
❹カンボジア風焼きそばの屋台。大きな道や路地には、テイクアウトの食事を売る屋台が多く見られる

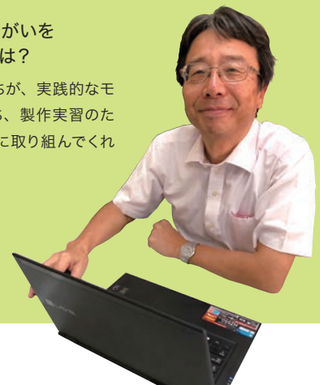
※クメール語

Q1 参加のきっかけは？

以前から、「自身の持つ技術や経験を何らかの形で生かしたい」という思いと、「異なる文化を持つ人々との交流」に興味を持ち続けていました。定年退職を機に、協力隊の活動を通じてこれらの思いが実現できればと考えて応募しました。

Q2 活動でやりがいを感じるときは？

私の指導する教員たちが、実践的なモノづくりに興味を持ち、製作実習のための教材開発に熱心に取り組んでくれる姿を見たときです。



木村千良（きむらかずよし）さん

派遣国　カンボジア
職　種　電子工学
派遣年度　2017年度2次隊

PROFILE

1952年生まれ、大阪府出身。75年に国立電気通信大学を卒業した後、新コスモス電機（株）に入社し、主にガスセンサの研究・開発に従事。89年から工業高等学校にて電気科教諭として勤務。2014年にはJICA草の根技術協力事業のプロジェクトメンバーとしてベトナムで活動。17年10月、シニア海外ボランティア（※）としてカンボジアに赴任。

※派遣名称は派遣当時のものです。

木村さんのある日の1日

生活

周囲との関わりを楽しみながら

木村さんは妻・まりさんを※随伴しての赴任。自宅での食事はまりさんが現地の食材でつくる日本食がメインだ。たまに無性にお造りが食べたくなり、隊員に声をかけて日本式居酒屋を訪れることも。最大の気晴らしは、自宅リビングで行うギターの練習。テレビは、日本を含む世界各国の計80チャンネル以上を見ることができるので、リアルタイムで世界の情報が入る。

※家族随伴制度は、現在廃止されています。

06:00 起床、出勤準備、朝食

朝食は自宅でパンやフルーツなどを。よく食べるのはフランスパン。フランス文化の影響で、とてもおいしい。写真は「世界最大の果物」として知られるジャックフルーツ

木村さんが借りているアパートの外観。セキュリティがしっかりしているうえ、管理するスタッフがとても親切で、問題が起きると迅速に対応してくれる

床が木製で落ち着いた雰囲気のリビング。悩みは、アリが多く、食料の保管に気を使うこと

08:00 出勤

右：木村さんは学生への実習授業も担当。「授業は英語で行うのですが、ときどきクメール語で話すと、なぜか笑い声が聞こえてきます」（木村さん）
左：郊外に位置する配属校の本館。蓮の花が咲く池に囲まれ、落ち着いて学習できる環境だ

配属先へは三輪タクシー「トゥクトゥク」に乗って約40分

11:00 昼食・休憩

❸

❷

❶

昼食は決まって配属先の学食で同僚たちととる。この日のメニューは、野菜と魚のスープ（❶）、もやしと豆腐と豚肉の炒め物（❷）、クメール風オムレツ（❸）。配属先からの補助もあり、1食あたり45円ほどで済む

13:00 午後の活動

電子部材や工具を扱う店。店内は大勢の客でごった返している。活動に必要な道具は、店をハシゴして探すこともしばしば

驚くほどおいしいケーキに出合うことも。市内で見つけたお祝い用のケーキは外見も可愛らしい

17:00 帰宅（途中、寄り道）

19:00 夕食

協力隊員たちを自宅に招いての食事。近況報告をし合いながらの団欒は、木村さん夫婦にとっての楽しみのひとつ。「お好み焼きは数少ない私の得意料理！ 隊員たちを招待したときにも振る舞います」（木村さん）

20:30 自由時間

ギターの練習、メールチェック、活動の準備など

22:00 シャワー

23:00 就寝

ある休日のひとコマ

休日は基本的に土・日。休日を利用し、自宅で先生に就いてクメール語の学習に取り組んでいる

散髪は自宅のキッチンでまりさんにお任せ

間取	2LDK（協力隊員が上京の際、宿泊できるように2バスルームの物件を選択）
電気	有（数年前に火力発電所ができたことで、停電は劇的に解消。電気代は日本に比べると割高）
水道	有（飲料水は20リットル入りボトルのミネラルウォーターを購入）
風呂	有（シャワーの水圧は十分）
トイレ	洋式・水洗式
洗濯	洗濯機

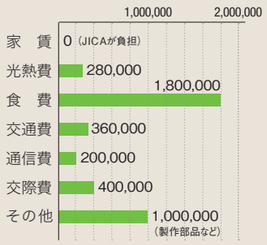
一緒に活動を進める関係者

フレンドリーな若手教員たち。「困難の解決策を彼らと共に考え、導き出せたときに、喜びを感じます」（木村さん）

1カ月の家計簿

※単位：カンボジアリエル
（1カンボジアリエル＝約0.03円）

【収入】約3,300,000（JICA支給のUSドルを換算）
約2,200,000（随伴家族手当分）
【支出】約4,040,000（内訳は下のグラフ）

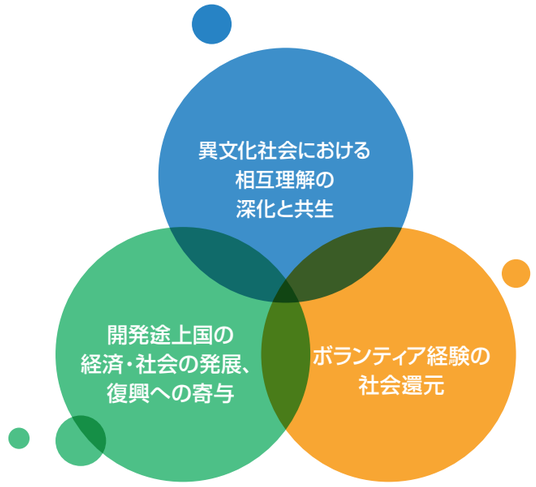


電子工作やアンテナ製作のために購入した「ハンダごて」「ラジオペンチ」「ニッパー」。温度調節器がついたハンダごては、特にお気に入りのひと品

JICAボランティア事業の概要

JICAボランティア事業とは

JICAボランティア事業は日本政府の政府開発援助（ODA）予算により、独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施する事業です。開発途上国からの要請（ニーズ）に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のために生かしたい」と望む方を募集し、選考、訓練を経て派遣します。



JICAボランティア事業の目的

JICA海外協力隊の特徴は、現地の人々と共に生活し、彼らと同じ目線で共に考え、相互理解を深めながら、その国の経済・社会の課題解決に寄与するという、「草の根レベル」の活動であるという点にあります。一方、そうした経験で養った国際的視野は、その後、日本や世界の社会づくりに役立てていくことも期待されています。以上のようなJICAボランティア事業の目的は、右記の3つに整理されます。

JICA海外協力隊の種類

JICA海外協力隊の案件は、派遣される期間、専門性、活動する地域・コミュニティにより、以下の5つに大別されます。

長期

派遣期間が1～2年、年に2回（春・秋）の募集期がある案件です。

［一般案件］

「自分の技術・知識・経験を生かしたい」という強い意欲を持つ方に、広く「職種」で応募していただく案件です。46歳以上の方は「海外協力隊」という呼称で派遣されます。

青年海外協力隊

「開発途上国」の人々と同じ言葉を話し、共に生活・協働しながら、国づくりのための協力をします。

日系社会 青年海外協力隊

「日系社会」の人々と共に生活・協働しながら、中南米地域の発展のために協力しています

［シニア案件］

「自分の専門的な技術・知識・経験を生かしたい」という強い意欲を持つ方に、「個別案件」へ応募していただく案件です。合格された案件によって派遣呼称が決まります。

シニア海外協力隊

「開発途上国」の人々と同じ言葉を話し、共に生活・協働しながら、国づくりのための協力をします。

日系社会 シニア海外協力隊

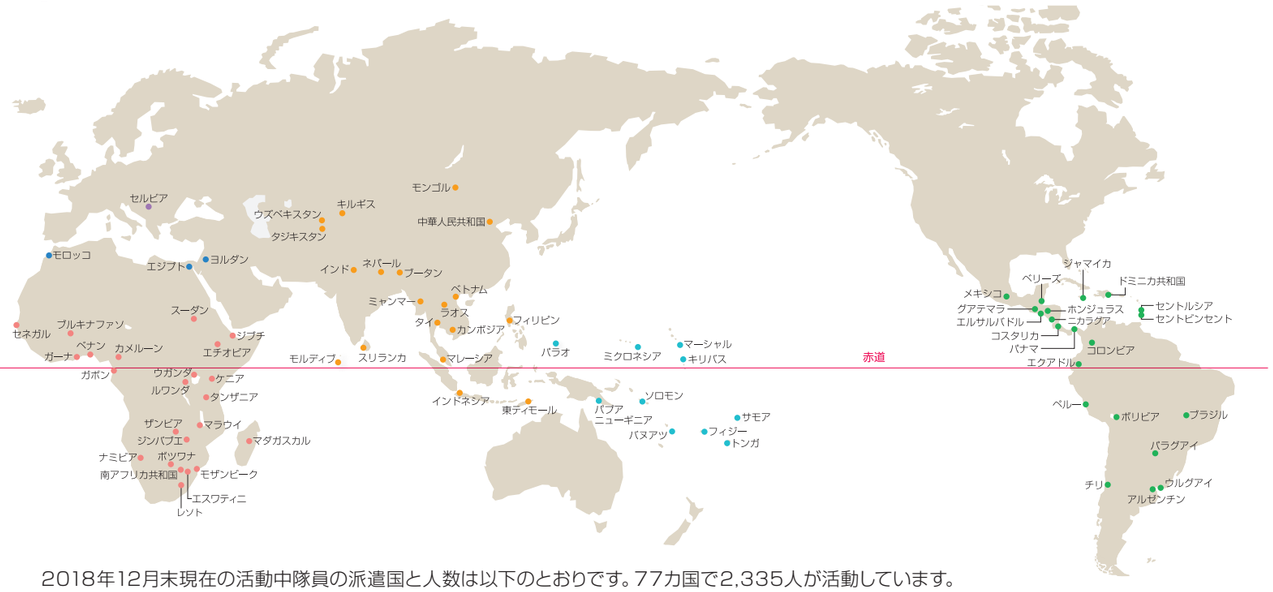
「日系社会」の人々と共に生活・協働しながら、中南米地域の発展のために協力しています。

短期

派遣期間が1カ月～1年未満、年に3回（3月～、8月～、11月～）の募集期（予定）がある案件です。

JICA海外協力隊（短期派遣）　「開発途上国」で1カ月～1年未満の活動をします。

JICA海外協力隊派遣人数（国別）



2018年12月末現在の活動中隊員の派遣国と人数は以下のとおりです。77カ国で2,335人が活動しています。

※JV＝青年海外協力隊　SV＝シニア海外ボランティア　日系JV＝日系社会青年ボランティア　日系SV＝日系社会シニア・ボランティア　（単位：人）

▼アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	53	4
エスワティニ	4	1
エチオピア	40	1
ガーナ	58	3
ガボン	18	9
カメルーン	19	
ケニア	46	7
ザンビア	79	15
ジブチ	13	
ジンバブエ	7	
スーダン	32	
セネガル	47	3
タンザニア	55	2
ナミビア	14	
ブルキナファソ	16	
ベナン	53	
ボツワナ	14	1
マダガスカル	36	
マラウイ	76	
南アフリカ共和国	6	7
モザンビーク	43	2
ルワンダ	40	
レソト	1	1
小計	770	56

▼アジア地域

国名	JV	SV
インド	8	
インドネシア	15	2
ウズベキスタン	18	7
カンボジア	32	15
キルギス	30	
スリランカ	54	5
タイ	37	6
タジキスタン		2
中華人民共和国	12	
ネパール	45	3
東ティモール	32	
フィリピン	29	3
ブータン	21	5
ベトナム	42	22
マレーシア	24	8
ミャンマー	9	5
モルディブ	9	
モンゴル	39	
ラオス	38	5
小計	494	88

▼大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	9	
サモア	26	1
ソロモン	33	6
トンガ	14	2
バヌアツ	19	5
パプアニューギニア	27	4
フィジー	28	4
マーシャル	9	4
ミクロネシア	11	9
小計	186	40

▼欧州地域

国名	JV	SV
セルビア		2
小計		2

▼中東地域

国名	JV	SV
エジプト	16	3
モロッコ	17	7
ヨルダン	32	
小計	65	10

▼中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		16	5	3
ウルグアイ		9		
エクアドル	52	7		
エルサルバドル	6	1		
グアテマラ	27	3		
コスタリカ	20	11		
ジャマイカ	20	15		
セントビンセント	4			
セントルシア	9			
チリ	6	6		
ドミニカ共和国	40	8	4	1
ニカラグア	1	1		
パナマ	20	1		
パラグアイ	39	2	10	2
ブラジル			69	18
ベリーズ	15			
ペルー	43	5		
ボリビア	45	3	2	1
ホンジュラス	33			
メキシコ	1	10		
小計	395	114	90	25

JICA海外協力隊派遣人数（種類別）

2018年12月末現在のボランティア種類別派遣人数は以下のとおりです。（単位：人）

	青年海外協力隊	シニア海外ボランティア	日系社会青年ボランティア	日系社会シニア・ボランティア	合計
派遣中（男性／女性）	1,910（844／1,066）	310（224／86）	90（32／58）	25（6／19）	2,335（1,106／1,229）
累計（男性／女性）	44,478（23,708／20,770）	6,453（5,224／1,229）	1,455（555／900）	532（246／286）	52,918（29,733／23,185）

クロスロード
発行日　2019年2月1日
編集・発行：独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25二番町センタービル
TEL：03-5226-9837　FAX：03-5226-6379

落丁・乱丁の場合はお取り替えしますので、発行元までご連絡ください。 ※本誌に掲載されている記事等の内容は執筆者の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

クロスロード
2019年2月1日発行　編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局　〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル　TEL：03(5226)9837　FAX：03(5226)6379

JICA海外協力隊に関するお問い合わせ先

■本誌掲載記事／応募に関するお問い合わせ

名　称	TEL ／ FAX	e-mail	住　所
【本誌掲載記事全般に関するお問い合わせ】 JICA青年海外協力隊事務局 参加促進課	TEL：03（5226）3513 FAX：03（5226）6379	jvtpp@jica.go.jp	〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル
【応募に関するお問い合わせ】 JICA海外協力隊募集事務局	TEL：03（6734）1242	contact@jocv.info	〒100-8228 東京都千代田区大手町 2-6-2 5F
【ウェブ応募システムに関するお問い合わせ】 JICA海外協力隊ウェブ応募問い合わせ窓口 （公益社団法人青年海外協力協会内）		web-entry-support@joca.or.jp	

■JICA国内拠点連絡先

名　称	TEL ／ FAX	e-mail	住　所	所轄地域
JICA 北海道（札幌） （北海道センター（札幌））	TEL：011（866）8421 FAX：011（866）8382	hkictpp@jica.go.jp	〒003-0026 北海道札幌市白石区本通16丁目南4-25	北海道（道央・道北・道南）
JICA 北海道（帯広） （北海道センター（帯広））	TEL：0155（35）1210 FAX：0155（35）1250	jicaobic@jica.go.jp	〒080-2470 北海道帯広市西20条南6丁目1-2	北海道（道東）
JICA 東北 （東北センター）	TEL：022（223）4772 FAX：022（227）3090	jicathic - jv@jica.go.jp	〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1 仙台第一生命タワービル20階	青森県・岩手県・宮城県・ 秋田県・山形県
JICA 二本松 （二本松青年海外協力隊訓練所）	TEL：0243（24）3200 FAX：0243（24）3214	jicanjv - bk@jica.go.jp	〒964-8558 福島県二本松市永田字長坂4-2	福島県
JICA 筑波 （筑波センター）	TEL：029（838）1117 FAX：029（838）1776	jicatbic@jica.go.jp	〒305-0074 茨城県つくば市高野台3-6	茨城県・栃木県
JICA 東京 （東京センター）	TEL：03（3485）7461 FAX：03（3485）7025	tictpp1@jica.go.jp	〒151-0066 東京都渋谷区西原2-49-5	群馬県・埼玉県・千葉県・ 東京都・新潟県
JICA 横浜 （横浜センター）	TEL：045（663）3220 FAX：045（663）3265	yictpp@jica.go.jp	〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-3-1	神奈川県・山梨県
JICA 駒ヶ根 （駒ヶ根青年海外協力隊訓練所）	TEL：0265（82）6151 FAX：0265（82）5336	jicakjv - jocv@jica.go.jp	〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂15	長野県
JICA 北陸 （北陸センター）	TEL：076（233）5931 FAX：076（233）5959	jicahric@jica.go.jp	〒920-0853 石川県金沢市本町1-5-2 リファーレ オフィス棟 4階	富山県・石川県・福井県
JICA 中部 （中部センター）	TEL：052（533）0220 FAX：052（564）3751	jicacbic@jica.go.jp	〒453-0872 愛知県名古屋市中村区平池町4-60-7	静岡県・岐阜県・愛知県・ 三重県
JICA 関西 （関西センター）	TEL：078（261）0352 FAX：078（261）0357	jicaksic - jocv@jica.go.jp	〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2	滋賀県・京都府・大阪府・ 兵庫県・奈良県・和歌山県
JICA 中国 （中国センター）	TEL：082（421）6305 FAX：082（420）8082	jicacic - jocv@jica.go.jp	〒739-0046 広島県東広島市鏡山3-3-1 ひろしま国際プラザ内	鳥取県・島根県・岡山県・ 広島県・山口県
JICA 四国 （四国センター）	TEL：087（821）8824 FAX：087（822）8870	jicaskic@jica.go.jp	〒760-0028 香川県高松市鍛冶屋町3番地 香川三友ビル1階	徳島県・香川県・愛媛県・ 高知県
JICA 九州 （九州センター）	TEL：093（671）6311 FAX：093（671）0979	jicakic@jica.go.jp	〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1	福岡県・佐賀県・長崎県・ 熊本県・大分県・宮崎県・ 鹿児島県
JICA 沖縄 （沖縄センター）	TEL：098（876）6000 FAX：098（876）6014	oictpp@jica.go.jp	〒901-2552 沖縄県浦添市字前田1143-1	沖縄県

JICA海外協力隊
ウェブサイト
はこちらから

これまで青年海外協力隊の「隊旗」として活用されていたマークが、改めてJICAボランティア事業のシンボルマークに制定されました。2018年度2次隊より、派遣前訓練の終了時に隊旗をモチーフにしたバッジ（写真）がJICA海外協力隊員へ配布されています。このバッジは、公の場や活動などで適宜着用されます。